

小牛田町文化財調査報告書第3集

駒米遺跡

平成10年3月

小牛田町教育委員会

駒 米 遺 跡

序 文

小牛田町には縄文時代から近世にいたるまでのおおよそ50箇所の埋蔵文化財の存在がしられています。その埋蔵文化財によって小牛田町の歴史が現代まで連綿と続いていることを知ることができます。このような人間活動の歴史は、町民はもとより国民共有の貴重な文化遺産であることは言うまでもありません。かけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって重要な責務と考えます。

しかしながら、人間の生活や活動が土地と非常に関係が深いため、種々の開発行為と大きな関わりを持つことも事実であります。特に、昭和40年代からの「高度経済成長期」においては、開発行為によって破壊・消滅の危機にさらされる文化遺産が多くありました。

このような時代の流れの中で、経済開発優先への反省から、人々の価値観に変化が現れてきました。物質的豊かさへの大きな転換であります。それに伴い我国固有の文化的基盤をなす祖先の思考・行動の軌跡を解明し、それを基にして将来のあるべき姿を模索しているところです。言うまでもなく、昔の人々の生活痕跡が具体的な形で残されている埋蔵文化財は、地域の歴史を解明する貴重な歴史資料であり、地域の伝統文化の根源をなすものであります。

当教育委員会としては、常に遺跡の所在等について開発関係機関への周知をはかるとともに、協議・調整を重ね、できる限りの保存に努めているところであります。

本書は、開発関係機関との協議に基づき、平成9年度に実施した駒米遺跡の発掘調査報告書であります。これらの成果が、地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に調査にあたり多大なご協力・ご支援を頂きました県教育庁文化財保護課、関係各位並びに発掘作業にあたられた皆様に厚く御礼を申し上げる次第です。

平成10年3月

小牛田町教育委員会
教育長 石塚信雄

例　　言

- 本書は小牛田町が計画した町立小牛田保育所移転改築新築工事に伴う駒米遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
- 調査、報告書の作成は小牛田町教育委員会が主体となり、宮城県教育委員会が担当した。
- 本書における土色の記述は『新版標準土色帳』(小山・佐竹:1973)に基づく。
- 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000「小牛田」を複製して使用した。
- 報告書の作成に際して、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が出たが、原図の番号をそのまま本書に使用した。また、遺構番号は通し番号である。
- 報告書における遺構、遺物の実測図、写真図版の縮尺は原則として以下の通りである。
遺構…1/60　　土器、磨石、第10図12・13の石製模造品…1/3　　石製模造品、石器…2/3
- 遺構の種別については次の略号を使用して区別した。
掘立柱建物跡 (S B)、竪穴住居跡 (S I)、井戸跡 (S E)、土壤 (S K)、
材木列 (S A)、溝跡 (S D)
- 本書の編集、執筆は宮城県文化財保護課職員の検討を経て、佐藤憲幸が行った。
- 発掘調査に際し、小牛田警察署から多大なご協力を賜った。この場を借りて感謝申し上げたい。
- 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は小牛田町教育委員会が保管している。

目　　次

第I章　遺跡の位置と環境.....	1
第II章　調査の方法と経過.....	1
第III章　層序.....	3
第IV章　発見された遺構と遺物	
1 竪穴住居跡.....	3
2 掘立柱建物跡.....	15
3 井戸跡.....	31
4 材木列.....	37
5 土壌.....	38
6 溝跡.....	40
7 表土出土の遺物.....	40
第V章　考察	
1 遺構・遺物の年代について.....	42
2 竪穴住居跡について.....	45
第VI章　まとめ.....	47

調査要項

遺跡名：駒米遺跡（こまごめいせき）

宮城県遺跡地名表登載番号：39029

遺跡記号：P R

遺跡所在地：宮城県遠田郡小牛田町北浦字駒米

調査原因：小牛田町立小牛田保育所移転改築新築工事

調査期間：平成9年6月9日～19日、7月2日～8月7日

対象面積：約3100m²

調査面積：約2300m²

調査主体：小牛田町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：天野順陽・高橋栄一・佐藤憲幸・三好秀樹・吉野 武・藤村博之・佐藤貴志

鈴木正樹（小牛田町）

調査協力：宮城県小牛田警察署

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

駒米遺跡は遠田郡小牛田町北浦字駒米に所在し、JR東北本線小牛田駅の西北方約700mの地点にあたる。

遺跡の所在する小牛田町は、宮城県北部の江合川や鳴瀬川によって形成された広大な大崎平野の東部にある。町の中心部には河川によって削り取られて独立した、東西に長い小起伏丘陵が横たわっており、その南側には鳴瀬川によって形成された河岸段丘が接している。丘陵の周囲は現在水田として利用されている。

駒米遺跡は、この丘陵北西部の北側斜面に立地している。現状は役場や住宅地、水田となっている。今回の調査区は役場から約200m北東の丘陵最裾部にあたり、北側が緩やかな北斜面、南側が緩やかな東斜面である。

丘陵上には本遺跡の他に、南側斜面に位置し、縄文時代早期から中世までの複合遺跡である山前遺跡をはじめ、縄文時代早中期葉の素山貝塚、新山貝塚、前・中期の影堂遺跡、後・晚期の船入遺跡、古墳時代の雑塚古墳、保土塚古墳、京錢塚古墳など多数の遺跡が集中的に発見されており、本遺跡周辺には八景古墳群や東谷地古墳などの古墳時代後期の円墳が存在する。中でも山前遺跡は、防御的性格を持つ大溝に区画された古墳時代前期の集落などが発見され、学術的にも注目される遺跡で昭和51年には史跡に指定されている。

なお、本遺跡の発掘調査は昭和41年3月と昭和46年3・4月にも行われている。町役場建設に際して調査されたもので、8世紀末～9世紀前葉頃の竪穴住居跡1軒が発見され、その周囲からは、同時期頃の土師器、須恵器を中心に、有孔円盤や鉄鎌、砥石などが出土している。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の調査は、小牛田町立小牛田保育所の移転改築工事に係るものである（第2図）。

工事計画後、移転個所に遺跡がかかっていた為、工事前に小牛田町、同町教育委員会と宮城県教育府文化財保護課とが対応についての協議を行い、平成9年5月20日に遺跡内の内容把握を目的として確認調査を行った。その結果、竪穴住居跡等の遺構の存在が確認された為、事業者と再度取り扱いの協議を行ったが現状保存は難しく、工事に先立ち、保育所の敷地約3100m²を対象に発掘調査を実施することとなった。調査は6月9日～19日、7月2日～8月7日にかけて実施した。その方法と経過は以下の通りである。

表土の除去後、地山面で遺構確認を行い、古墳時代の竪穴住居跡や古代の井戸跡、古代以降の掘立柱建物跡、溝跡などが検出された。遺構精査に際しては、工事基準杭No.4を原点とし、南北軸を座標北に合わせて組んだ直角座標をもとに3m単位のグリッドを設定し、調査の状況に応じて、20分の1の平面図・断面図を作成した。工事基準杭No.4の国家座標はX=-161838.192 Y=19971.876である。



遺跡名	道跡名	立地	種別	時代	遺跡名	道跡名	立地	種別	時代
1 貴末遺跡	丘陵	露 神	古風		16 後熱社古墳	丘	荒 内	城	古墳中
2 新山前古墳	丘陵斜面	貝 塚	中	17 鎮谷森古墳	丘	荒 内	城	古墳中	
3 那生七船跡	丘	塚	中世	18 志仏山古墳	冲積平野	内	城	古墳中	
4 一本松古墳	丘陵斜面	吉 瀬	古墳後	19 玉無古墳	丘	荒 内	城	古墳後	
5 八雲古墳群	丘	廣	廣	20 萩谷地古墳	自然堤防	内	城	古墳後	
6 那生道跡	自然堤防	蘆 原・柳 原	古風・古 墳後・古 代	21 塚前道跡	自然堤防	包 含	城	古代	
7 一石原古墳	冲積平野	門	廣	22 貝後原古墳	丘	坡	城	奈良	
8 丁名無古墳	自然切跡	門	廣	23 田原山道跡	丘陵斜面	貝原・斐漢跡	廣	奈良・中世	
9 舟人道跡	丘陵斜面	包 含	谷	24 山難鬼古墳	丘	坡	城	中世	
10 繁山貝塚	丘	貝 塚	古風後	25 化粧坂道跡	丘	坡	包 含	地	
11 綿原古墳	丘	塚	古墳後	26 千福古墳	自然堤防	門	城	古墳	
12 宮坂屋古墳	丘	塚	前方後方	27 お買堂古跡	丘	坡	城	中世	
13 那山道跡	丘	包 含	塚	28 牧原道跡	丘	坡	包 含	地	
14 牛羽道跡	丘	含	塚	29 亂森六古墳	糞 穴	古 墳	城	古墳後	
15 保土居古墳	丘	荒	場	30 小町井遺跡	丘陵	荒 内	城	古代	

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

また、35mmカラースライド、白黒および60mmの白黒写真による記録も併せて行った。

調査は8月7日に終了した。なお、8月には必要に応じて調査終了日まで地元の来訪者に対する説明を随時行った。



第2図 調査区位置図

第III章 層序

調査区は標高10m前後の丘陵裾部にあり、調査前は休耕田となっていた。耕土（I層）の下には上からII層：暗褐色シルト（7.5YR3/3）、III層：黒褐色シルト（10YR2/2）、IV層：灰白色火山灰、V層：黒色泌藉土（10YR1.7/1）、VI層：暗褐色砂質シルト（10YR3/3）が堆積し、その下には地山漸移層であるVII層：褐色砂（10YR4/4）、地山であるVIII層：明黄褐色粘土（10YR7/6）が認められた。これらの内、I層は調査区全体に分布しており、厚さ30cm前後である。II～VII層は調査区北部と東部の標高の低い地点にのみ認められ、その他では削平により失われている。特にIV層の灰白色火山灰は調査区東部の極一部に薄い堆積が認められるのみである。厚さは最も残りの良い部分でII層が約20cm、III層が約15cm、IV層が約2cm、V層が約10cm、VI層が約30cmである。

第IV章 発見された遺構と遺物

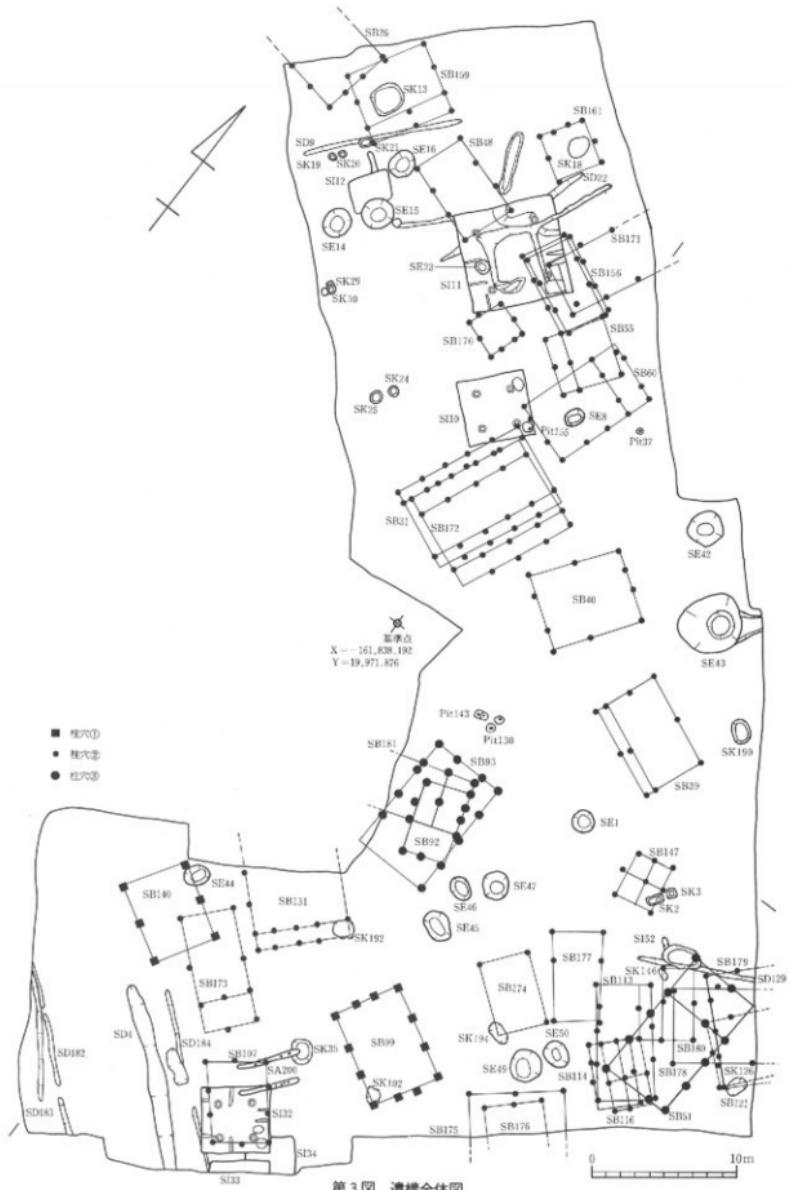
1 穫穴住居跡

【S I 10】

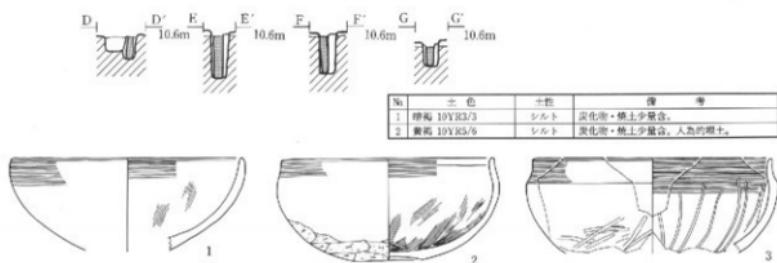
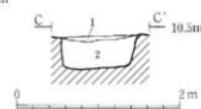
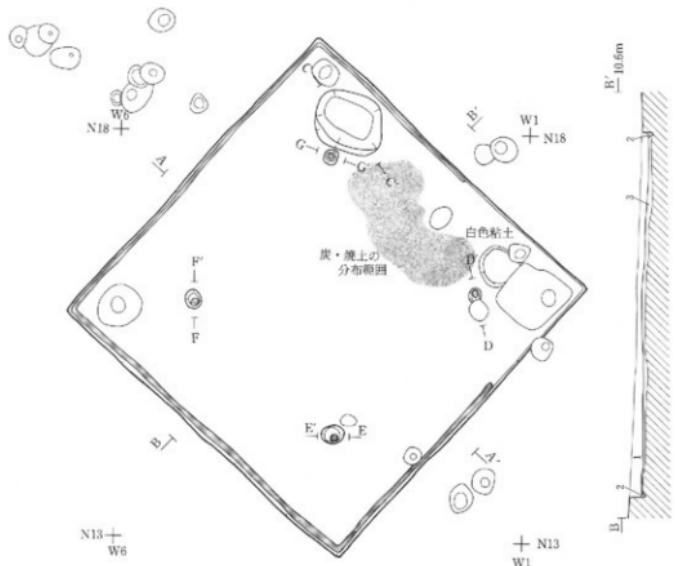
【確認面・重複】確認面はVIII層上面である。S B31と重複し、これよりも古い。

【規模・平面形】一辺4.5mの方形である。

【床面】地山ブロックを多く含む暗褐色砂質シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。



第3図 遺構全体図



第4図 SI10住居跡

1: 貯藏穴底面
2~5: 焼土。

【周溝】北東隅を除き、全辺で確認された。幅5～8cm、深さ5～12cmである。

【カマド】北西隅に貯蔵穴があることや、北側中央部に焼土や炭が分布していることから、北辺に付設されていたと考えられる。カマド本体や煙道は残存していない。

【貯蔵穴】北西隅にあり、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.4mの、やや不整の隅丸方形である。焼土、炭を少量含む黄褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【主柱穴】4個あり、掘方は直径0.2～0.3mの円形で、深さは0.3～0.6mである。柱痕跡は直径10cm前後の円形である。柱の間隔は東西2.4m、南北2.5mである。

【壁】最も残りの良い部分で、高さ0.2m程度であり、ほぼ直立する。

【堆積土】炭化物や焼土を含む暗褐色砂質シルトの自然堆積層である。また、北東隅には白色粘土塊が床面上に認められた。

【方向】東辺でN-42°-Eである。

【出土遺物】土師器壺・高環・甕、黒曜石の石核（写真図版13）等が出土している。

壺は口縁部が内湾するものの(1)と、口縁部が括れて直立するもの(2・3)があり、2の底部はやや上げ底になっている。甕は口縁部、高環は脚部のそれぞれ小破片で全体の器形は不明である。

器面調整は、1は磨滅が激しく不明瞭である。2は外面がヘラケズリとヨコナデ、内面はヘラナデとヨコナデ、3は内外面ヘラミガキ後、ヨコナデである。4は内外面ヨコナデで、外面は更にヘラミガキされている。5は外面がヨコナデ後、ヘラミガキ、内面はナデである。

2・4の胎土には赤褐色粒子が多く含まれ、色調は橙色を呈している。

【S I 11】

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S B48・156・170・S E23と重複し、これよりも古い。

【規模・平面形】一辺6.9mの方形である。

【床面】中央部および斜面上方である住居南側は地山、その他は地山ブロックを含み、粘性のあるにぶい黄褐色シルトの掘り方理土を床面としている。カマド周辺や中央部と比較して、周囲は一段高くなっている、幅1.3～1.4m、高さは北西隅が最も高く15cm以上、南・東側で10～15cmの高低差がある。北西隅については削平されており、本来は更に高低差があったものと考えられる。

【周溝】西辺と北辺の一部で途切れるものの、全辺で確認された。幅3～5cm、深さ3～20cmで、中でも地山を床とする部分が特に浅く、3～5cm程度である。

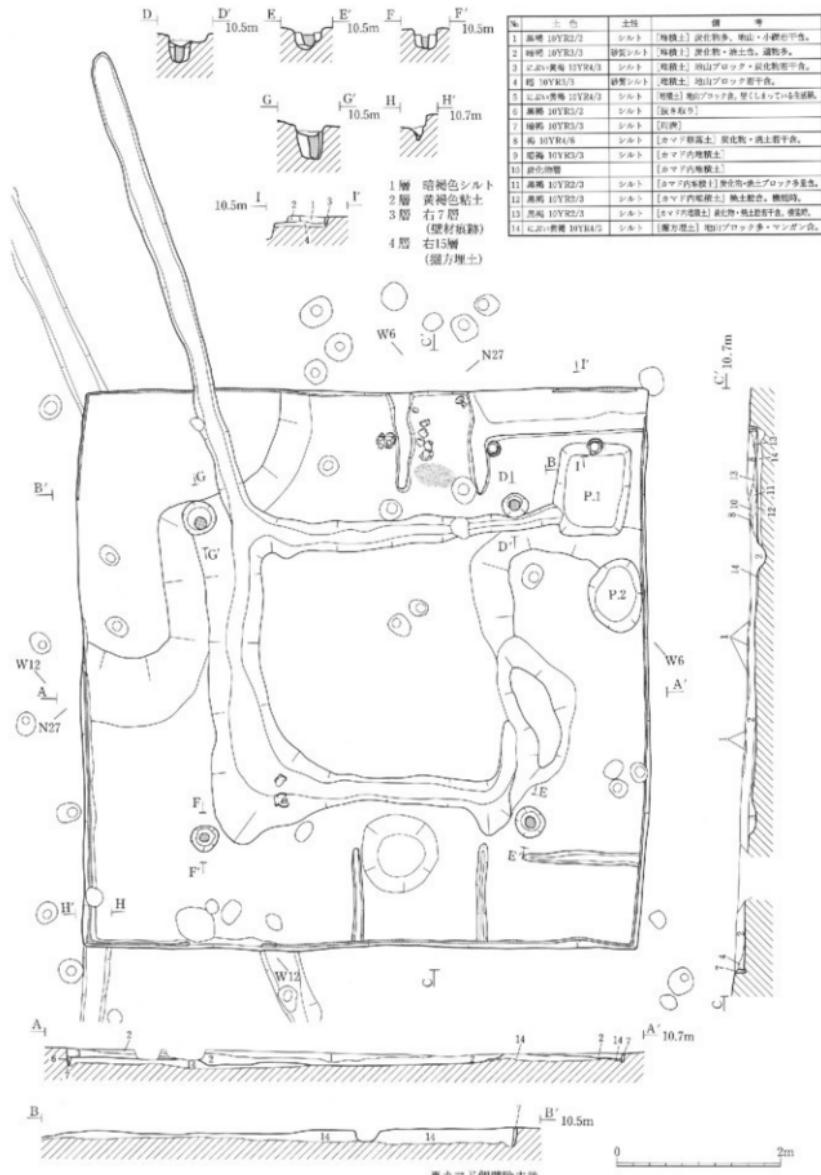
【カマド】北辺の中央部やや東よりに付設されている。本体側壁は1.2mと長く、内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は検出されていない。

【貯蔵穴】北東隅で2カ所検出した。P.1は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.3mの隅丸方形で、P.2は長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2mの梢円形である。

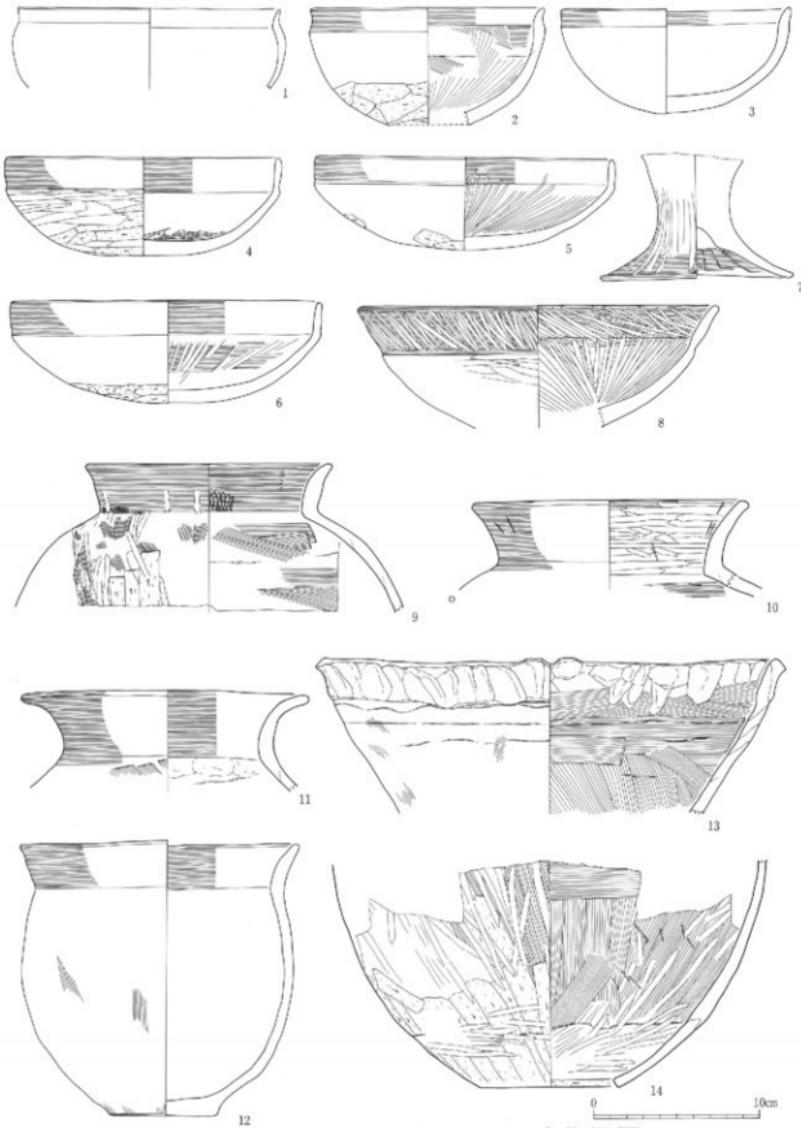
【主柱穴】4個あり、掘方は直径0.3～0.4mの円形で、深さは0.3～0.4mである。柱痕跡は直径11～14cmの円形である。柱の間隔は東西4.0m、南北3.9mである。

【壁】最も残りの良い部分で、高さ0.2m程度であり、ほぼ直立する。

【堆積土】炭化物や焼土を含む暗褐色砂質シルトなどの自然堆積層である。



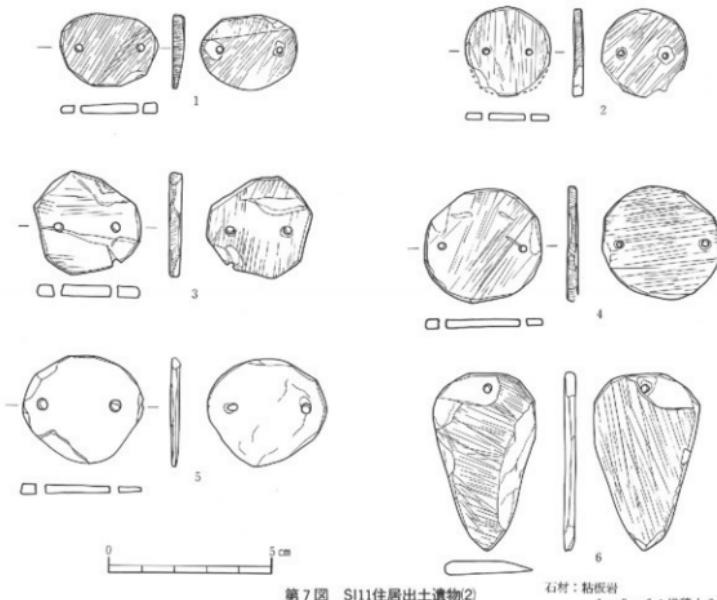
第5図 SI11住居跡



○は赤彩

第6図 SI11住居跡出土遺物(1)

6・10・11:床面
7・8:カマド内
1・2・9・12・14:外延溝底面(住居内)
3・5・13:堆積土2層



第7図 SI11住居出土遺物(2)

石材：粘板岩
1・3～6：地積土 2層
2：周溝

[方向] 東辺でN-41°-Eである。

[外延溝]住居内をほぼ方形に区画して、住居中央部と周辺部との境を形成し、北辺西寄りから住居外に延びる溝跡である。幅0.2~0.7mで南西コーナーでは1.3m程に膨らんでいる。深さは中央部の床面から5~15cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

[間仕切り溝]南壁から延びる溝が2条、東壁から延びる溝が1条検出された。幅10~15cm、深さ2~5cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

[その他]カマド東側に、本来の壁から0.5m内側にカマド側壁と同様の黄褐色粘土により壁を構築し、その内側を、地山ブロック混じりの暗褐色シルトによって埋め戻された部分がある。壁は直立し、8cm程残存するが、本来の高さは削平によって不明である。また、住居東側ほぼ中央部には、掘方を埋め戻す際に、これと同様の土で土手状に盛土した部分があり、残存する高さでは壁側の床面よりも更に5cm、中央部の床面からは15cm程高くなっている。

[出土遺物] 土器器坏・高坏・甕・瓶、手捏土器、石製模造品、琥珀等が出土している。

坏は口縁部が括れて外反するもの(第6図1~3)、口縁部と体部との境に段を有し、口縁部が直立するもの(4~6)と、外反するもの(8)がある。6の口縁端部は面取りがなされている。底部は2のみ平底である。甕は脚部を欠損するものが多く、全体の器形を知り得るのはやや鉢形を呈する12のみである。9~11は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部で外反している。高坏は脚部が円錐状を呈し

ている。甌は無底式である。

器面調整は、坏は外面がヘラケズリとヨコナデで、4・8はその後更にヘラミガキされている。内面はヨコナデとヘラミガキである。甌は口縁部が内外面ヨコナデで、9や10は更にヘラミガキされている。9の体部は外面がハケメ後ヘラケズリで、更にヘラミガキされている。内面はヘラナデである。甌は13が外面はナデ、内面はヘラナデ、14は外面は9と同様で、内面はヘラナデ後、ヘラミガキされている。1・3・12は磨滅が激しく不明瞭である。

8・9・11の胎土には赤褐色粒子が多く含まれ、色調は橙色を呈する。10の外面は赤彩が施されている。

【S I 12】

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S E15と重複し、これよりも古い。

【規模・平面形】 一辺2.9mの隅丸方形である。

【床面】 地山ブロックを多く含む黒褐色や灰黄褐色の砂質シルトの掘り方埋土を床面としている。南側がややしまりが弱く、窪んでおり、焼土や炭を多く含む灰黄褐色のシルトが堆積している。

【周溝】 全周していたものと考えられる。幅10cm、深さ7cmである。

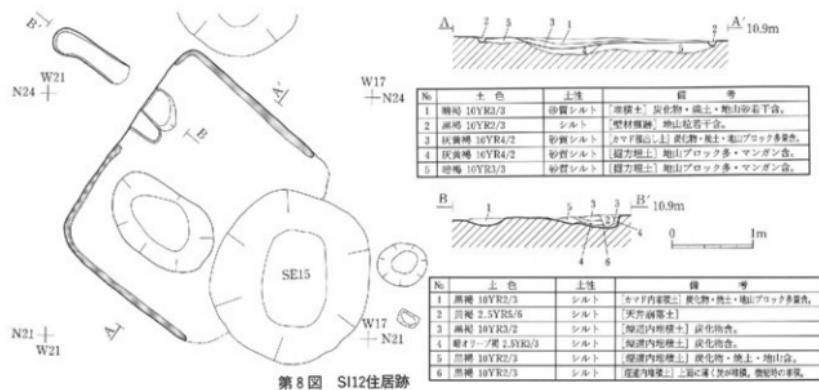
【カマド】 西辺の中央部やや北よりに付設されている。本体側壁は南側のみが残存し、燃焼部の焼け面がある。煙道は下方に傾斜して掘り込まれており、先端はやや膨らんでいる。

【壁】 残ど残存しておらず、最も残りの良い部分で、高さ1~2cm程である。

【堆積土】 炭化物や焼土を少量含む暗褐色砂質シルトの自然堆積層である。

【方向】 北辺でN-49°-Wである。

【出土遺物】 土師器甌が少量出土している。



【S I 32】

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 34、S B107と重複し、S I 34より新しく、S B107よりも古い。

【規模・平面形】東西4.5m、南北4.7m の方形である。

【床面】地山ブロックを多く含む褐灰色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。

【周溝】一部途切れるものの全辺で確認された。幅5~10cm、深さ5~10cmである。

【カマド】北辺の中央部や西よりに付設されている。本体側壁は東側で1.0m、内側には燃焼室の焼面が残存する。煙道は検出されていない。

【貯蔵穴】北東側に3ヵ所検出した。最も大きいP.2は直径0.7m、深さ0.6mの円形である。P.1・3はともに、長径0.7m、短径0.5mの楕円形で、深さは0.2m前後である。P.1のみ、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【主柱穴】4個あり、掘方は一辺0.3m前後のやや不整の隅丸方形で、深さは0.6mである。柱痕跡は直径10~14cmの円形である。柱の間隔は東西2.2m、南北2.3mである。

【壁】最も残りの良い部分で、高さ0.3m程であり、ほぼ直立する。

【堆積土】灰黄褐色や暗褐色の自然堆積の砂質シルト層である。

【方向】西辺でN-52°Eである。

【間仕切り溝】南壁から延びる溝が2条、東壁、西壁から延びる溝が各1条検出された。幅は東西溝が20cm前後、南北溝が10~15cm、深さは南東側の2条が15cm前後、南西側の2条が2~5cmで、断面は浅い「U」字状を呈する。

【出土遺物】土師器壺・高壺・甕、手捏土器、須恵器甕、土鍤、石製模造品、紡錘車、磨石の他、堆積土中から玉髓製の剝片石器(写真図版13)等が出土している。

壺はすべて丸底で、口縁部と体部との境で屈曲して稜を有し、口縁部がやや内傾するもの(第10図2)、やや外傾気味に直立するもの(3)、底部から口縁部にかけて内湾するもの(1・4・5)がある。甕は胸部は中央に張りがあり球胴形を呈する(9)。高壺は脚部中空で下半を欠損するが円錐状を呈すると考えられる(6)。

器面調整は壺は外面がヘラケズリ・ヨコナデで、2・5はその後更に、ヘラミガキされている。3は磨滅が激しく不明瞭である。高壺は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。甕は内外面ヘラナデ後、ヨコナデである。1・2・3・5の胎土には赤褐色粒子が多く含まれ、3・5は色調が橙色を呈している。

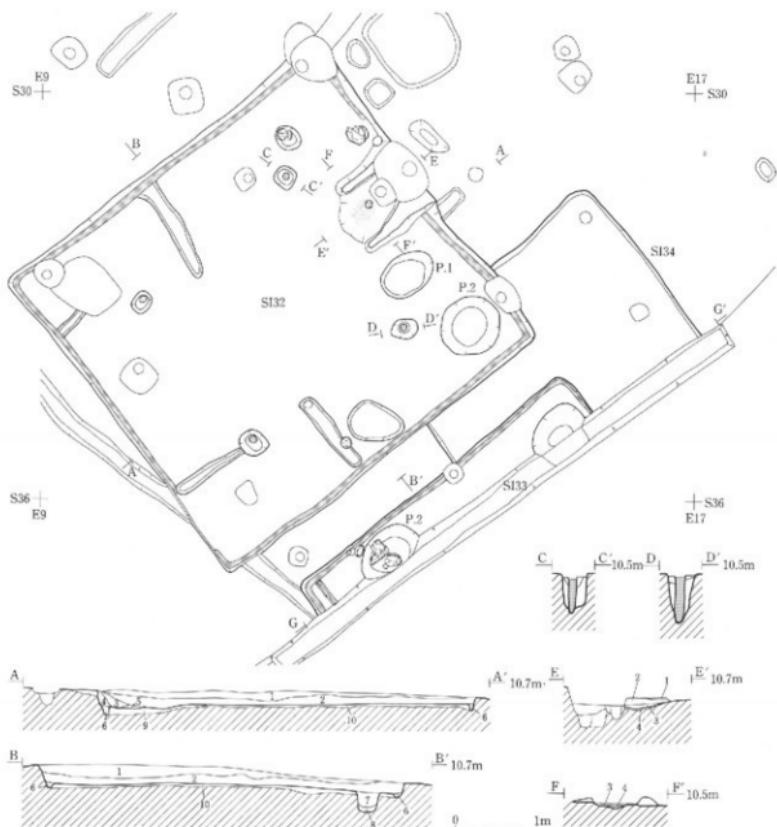
12・13は石製模造品の未製品と考えられるもので、石材は粘板岩である。12は両面、13は片面の端部を鑿のような工具で削り取り、薄くしている。また、床面にはこれらと同じ石材の剝片が散在しており、住居内において石製模造品が製作されていた状況がうかがえる。

【S I 33】

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S I 34と重複し、これよりも新しい。

【規模・平面形】南北が4.2mの方形と考えられる住居跡で、東側の大半は調査区外に延びる。

【床面】掘方を掘り、暗黄・黒褐色シルトで埋め戻し床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっており、南側には炭化材が残存する。



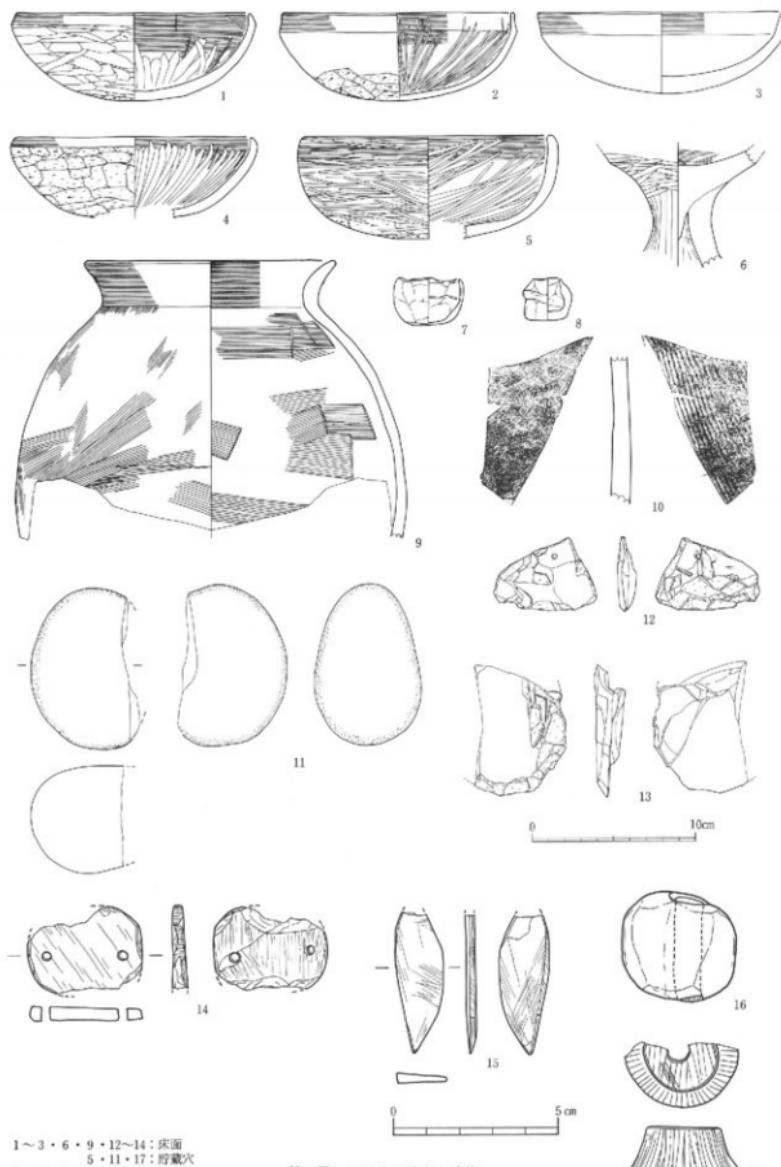
No	土色	土性	層号
1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト [堆積土] 黑色土ブロック多量含。	
2	灰褐色 10YR5/2	砂質シルト [堆積土] 小礫土若干。	
3	灰褐色 10YR4/2	シルト [堆積土] 黑色土・鐵土含。	
4	に赤い黄褐色 10YR4/3	シルト [堆積土] 鉻化土・地山若干含。	
5	黄褐色 10YR5/6	シルト [堆積土]	
6	黑褐色 10YR3/2	シルト [褐泥] 地山鉢若干含。	
7	暗褐色 10YR3/3	シルト [野底穴] 鉻化物・鐵土多量含。人為的擾土。	
8	に赤い赤褐色 5 YR4/4	シルト [野底穴] 地山ブロック多量含。人為的擾土。	

No	土色	土性	層号
9	暗褐色 10YR3/3	シルト [船方堆土] 鉻化物・地山ブロック多量含。	
10	黒褐色 10YR4/1	シルト [船方堆土] 地山ブロック多量含。	

表 E - F 土層接続表

No	土色	土性	層号
1	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト SI33 [堆積土] 鉻化物・地山鉢。	
2	暗褐色 7.5YR5/1	シルト [堆積土] 鉻化物・鐵土多量含。	
3	暗褐色 2.5Y4/2	粘質シルト [堆積土] 地山ブロック。	
4	暗褐色 7.5YR4/2	シルト [堆積土] 鉻化物多量含。	
5	暗褐色 10YR3/2	シルト [堆積土] 鉻化物・鐵土ブロック含。	
6	暗褐色 10YR3/2	シルト [褐泥] 鉻化物若干含。	
7	黄褐色 10YR5/6	粘質シルト [堆積土] 鉻起。	
8	暗褐色 10YR4/2	シルト SI33 [野底穴] 地山ブロック。人為擾土。	
9	暗褐色 7.5Y4/2	粘質シルト [船方堆土] 鉻化物若干含。	
10	黑褐色 10YR3/2	シルト [船方堆土]	
11	暗褐色 2.5Y4/2	粘質シルト [船方堆土] 地山ブロック。	
12	暗褐色 10YR3/3	シルト SI34 [船方堆土] 鉻化物・地山鉢。	
13	暗褐色 10YR4/1	シルト [船方堆土] 地山ブロック多量含。	

第9図 SI32・33・34住居跡



第10図 SI32住居跡出土遺物

1 ~ 3 • 6 • 9 • 12 ~ 14 : 床面
5 • 11 • 17 : 腹載穴
4 • 7 • 8 • 10 • 15 • 16 : 垂直土

【周溝】 調査範囲全辺で確認された。幅5cm、深さ4~8cmである。

【貯蔵穴】 2ヶ所検出した。P.1・2ともに円形ないしは梢円形と考えられ、直径0.8m、深さ0.2~0.3mである。P.1は住居機能中に地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。

【壁】 最も残りの良い部分で、高さ0.2m程であり、ほぼ直立する。

【堆積土】 炭、焼土を含む暗砂質シルトなどの自然堆積層である。

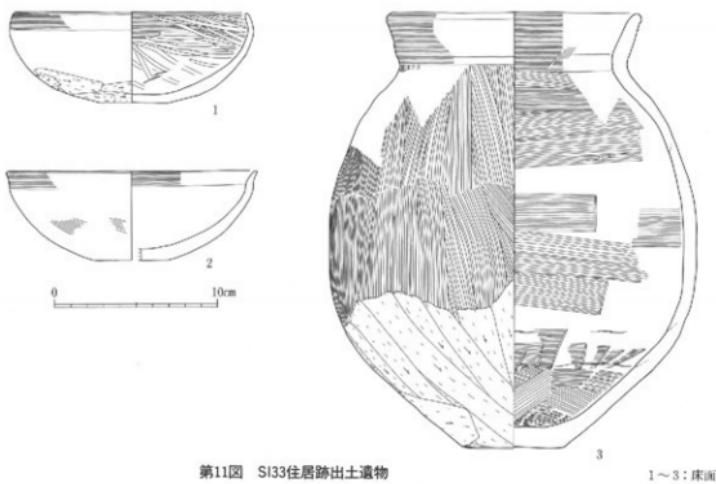
【方向】 西辺でN-51°-Eである。

【出土遺物】 土師器壺・壺・甕、手捏土器が出土している。

壺は共に平底で、底部から口縁部にかけて内湾するもの(第11図1)と、口縁部で括れて外反するもの(2)がある。甕は肩部の張りがやや弱いものの球胴形を呈している(3)。

器面調整は1は外面がヨコナデとヘラケズリ、内面はヨコナデ後、ヘラミガキされている。3は外面がハケメ後、ヨコナデやヘラケズリで、内面はハケメ後、ヘラナデやヨコナデがなされている。2は磨滅が激しく不明瞭である。

1の胎土には赤褐色粒子が多く含まれ、色調は橙色を呈している。



第11図 S133住居跡出土遺物

1~3:床面

【S I 34】

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 32・33、S B 107と重複し、これよりも古い。

【規模・平面形】 南北が3.4mの方形と考えられる住居跡で、東半は調査区外に延びる。

【床面】 地山ブロックを多く含む褐色シルトの掘り方埋土を床面としている。ほぼ平坦で堅くしまっている。

【壁】 最も残りの良い部分で、高さ0.2m程であり、ほぼ直立する。

【堆積土】炭化物を含む暗褐色砂質シルトの自然堆積層である。

【方向】北辺でN-38°-Wである。

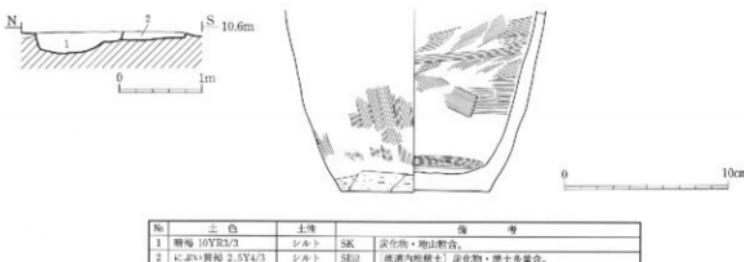
【出土遺物】土師器壺・甕が出土している。

【S I 52】

確認面はVII層上面である。削平やS D 129等に壊され、煙道の先端部分のみが残存する。

煙道の幅は0.4m、深さ0.1mで、堆積土は炭や焼土ブロックを多く含む、自然堆積のにぶい黄褐色シルトである。

【出土遺物】器種不明の土師器が出土している。



第12図 SI52 住居跡出土遺物

2 挖立柱建物跡

34棟検出され、調査区南側と東側にやや偏って存在している。

【S B26A・B】

南北3間、東西2間以上の建物跡で、同位置で一度建て替えられている。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S B159と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】Aは一辺が0.4mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒褐色シルトである。Bは直径が0.4mの円形や隅丸方形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山や黒褐色シルトブロックを多く含む、灰黄褐色砂質シルトである。

【柱痕跡】Bは直径15cm前後の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

【柱間・方向】柱間は東側柱列で南から1.6m・1.6m・1.9mで、総長は5.0mであり、南側柱列で東から2.0m・1.9m・不明である。方向は東側柱列でN-10°-Eである。

【出土遺物】柱穴から土師器甕が極少量出土している。

【S B31】

桁行5間、梁行1間の南北棟で、東西両側に廂がつく。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S I 10、S B172と重複し、S I 10よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】一辺が0.2~0.5mの隅丸方形や不整方形で、深さは最も深いもので0.6mである。埋土は地山

ブロックを多く含む、暗灰黄・黒褐色シルトなどである。

【柱痕跡】直径15cm前後の円形で、堆積土は炭化物粒を含む黒褐色シルトである。抜き取りや切り取りの痕跡がみられるものもある。

【柱間・方向】柱間は桁行が東入側柱列で南から2.0m・2.0m・1.7m・1.8m・1.9mで、総長は9.4mであり、梁行が北妻で4.1mで、廂の出が東西ともに0.9mである。方向は東入側柱列でN-23°-Eである。

【出土遺物】柱穴から土師器甕が出土している。

【SB39】

桁行2間、梁行2間の東西棟で南側に廂がつく。確認面はVII層上面である。

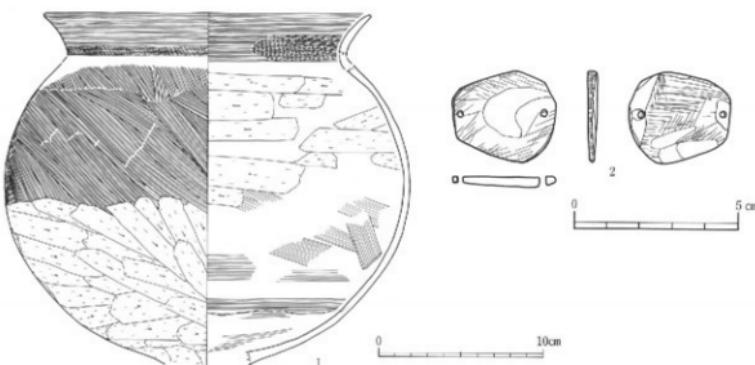
【柱穴】一辺および直径が0.2~0.4mの隅丸方形や円形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒褐・暗褐色シルトである。

【柱痕跡】直径14cm前後の円形で、堆積土は炭や地山の粒を少量含む暗褐・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】柱間は桁行が南入側柱列で西から3.5m・3.1mで、総長は6.6mであり、梁行が西妻で1.9m等間、総長が3.8m、廂の出は0.8mである。方向は南入側柱列でE-22°-Sである。

【出土遺物】柱穴から土師器甕や石製模造品が出土している。

甕は球胴形を呈し、胎土が緻密で、器壁は薄く仕上げられている。器面調整は外面がハケメ後ヘラケズリやヨコナデ、内面はヘラナデとハケメ後、ヘラケズリとヨコナデ調整されている。



第13図 SB39掘立柱建物跡出土遺物

【SB40】

桁行2間、梁行3間の南北棟である。確認面はVII層上面である。

【柱穴】一辺が0.2~0.4mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを多く含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は暗・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西側柱列で南から3.1m等間で、総長は6.2mであり、梁行が南妻で西から1.5m・2.6m・1.4mで、総長が5.5mである。方向は西側柱列でN-38°-Eである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が出土している。

【S B48A・B】

桁行3間、梁行1間の東西棟で、ほぼ同位置で一度建て替えられている。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 11と重複し、これよりも新しい。

【柱穴】 円形や楕円形で、残りが悪く、痕跡のみを残すものもある。Aは直径が0.3~0.5mで、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。Bは直径が0.3~0.4mあり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 A・Bともに直径10~18cmの円形で、堆積土は黒・黒褐色のシルトである。

【柱間・方向】 柱間はAが北側柱列で西から2.1m・1.6m・2.4mで、総長は6.1mであり、西側柱列で3.6mである。Bは北側柱列で西から2.0m・1.6m・2.4mで、総長は6.0mであり、西側柱列で3.8mである。方向は南側柱列でE-20°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B55】

桁行2間、梁行1間の東西棟で、南側に廂がつく。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B 60・156・171と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 直径および一辺が0.3~0.4mの円形や隅丸方形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径15cm前後の円形で、堆積土は黒褐色のシルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が南側柱列で2.0m等間、総長が4.0m、梁行が東妻で3.1mで、廂の出は1.2mである。方向は北側柱列でE-37°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B60】

桁行3間、梁行3間の南北棟で、北妻から1間目には間仕切りの柱穴がある。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 10、S B 55、S E 8などと重複し、S I 10よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】 一辺が0.3mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山小ブロックを少量含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で北から1.7m・1.8m・4.3mで、総長は7.8mであり、梁行が南妻で西から1.1m・1.8m・1.2mで、総長が4.0mである。方向は東側柱列でN-23°-Eである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【SB156A・B】

桁行3間、梁行1間の東西棟で、ほぼ同位置で一度建て替えられている。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 11や、S B55・171などと重複し、S I 11よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】 A・Bともに直径が0.3m前後の円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色のシルトである。Bの北西隅の柱穴には柱材が残存していた。

【柱間・方向】 柱間はAの桁行が南側柱列で西から1.8m・2.0m・1.8mで、総長は5.6m、梁行が西妻で3.2mである。Bは桁行が南側柱列で1.6m・2.2m・1.9mで、総長は5.7m、梁行が西妻で3.3mである。

方向はとともに西側柱列でN-22°-Eである。

【出土遺物】 Aの柱穴から土師器甕、Bの柱穴から、底部回転ヘラケズリ調整の須恵器坏が出土している。

【SB159】

桁行2間、梁行2間の南北棟で、東側に廂がつく。西側にも廂があった可能性も考えられるが、調査区外のため不明である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B26、S D 9、S K13などと重複し、S B26よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】 一辺および直径が0.2~0.3mの隅丸方形や円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックや炭を含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径10cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色のシルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で南から3.2m・2.7mで、総長は5.9mであり、梁行が南妻で西から1.9m・2.0m、廂の出が1.1mで、総長が5.1mである。方向は東側柱列でN-28°-Eである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が極少量出土している。

【SB161】

東西2間、南北3間の建物跡である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S K18と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 主に直径が0.2~0.4mの円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径15cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色のシルトである。

【柱間・方向】 柱間は西側柱列で南から0.9m・1.2m・0.9mで、総長は3.0mであり、南側柱列で西から1.8m・1.6mで、総長が3.4mである。方向は西側柱列でN-31°-Eである。

【出土遺物】 柱穴から中世陶器片が出土している。

【SB170A・B】

東西2間、南北3間の建物跡である。ほぼ同位置で一度建て替えられており、建て替え後は南北が1間割りとなっている。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S I 11と重複し、これよりも新しい。

【柱穴】A・Bともに直径が0.3m前後の円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は炭や地山ブロックを含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】直径10cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色の粘性のないシルトである。

【柱間・方向】柱間はAが東側柱列で南から0.8m・1.1m・0.7mで、総長は2.6m、南側柱列で西から1.4m・1.2mで、総長2.6mである。Bが東側柱列で2.5m、北側柱列で西から1.2m・1.3mで、総長2.5mである。方向はともに西側柱列でN-20°-Eである。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【SB171】

桁行2間以上、梁行1間の南北棟である。北妻については調査区外のため不明である。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S I 11、S B55・156と重複し、S I 11よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】直径が0.3~0.4mの円形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山小ブロックを少量含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】直径15cm前後の円形で、堆積土は黒色で粘性のあるシルトである。

【柱間・方向】柱間は桁行が東側柱列で南から2.6m・2.5m・不明で、梁行が南妻で3.9mである。方向は南妻でE-27°-Sである。

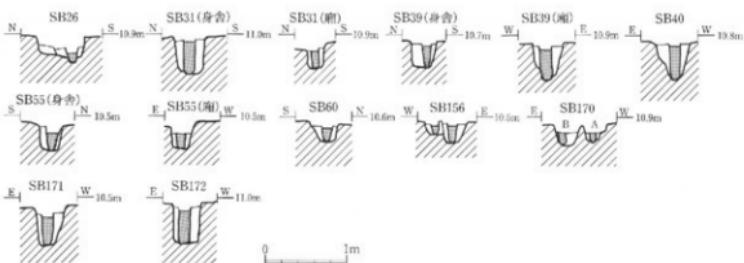
【出土遺物】遺物は出土していない。

【SB172】

桁行4間、梁行3間の南北棟で、東西両側に廂がつく。南妻東側の柱穴は削平により失われている。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S B31と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】一辺および直径が0.2~0.5mの隅丸方形や円形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを含む、暗・黒褐色シルトである。



第14図 掘立柱建物跡断面図(1)

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は地山小ブロックを含む暗・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西入側柱列で南から2.0m・2.2m・2.0m・1.9mで、総長は8.1mであり、梁行が北妻で西から1.2m・1.5m・1.9mで、総長4.6m、廻の出が東側は1.1m、西側は推定1.2mである。方向は西入側柱列でN-22°-Eである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が出土している。

【S B51】

桁行4間、梁行2間の南北棟で、北妻から1間目に間仕切りと思われる柱穴がある。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B113・116・121・178・179と重複し、S B113・116よりも新しい。他は不明である。

【柱穴】 多くは抜き取り穴によって壊されているが、長径0.5~0.8m、短径0.4~0.5mの楕円形で、深さは最も深いもので0.7mである。埋土は地山や暗褐色シルトブロックを多く含む、黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は地山ブロックを少量含む黒褐色粘質シルトである。多くは不整形の土壤を掘り、抜き取られており、その後、地山ブロックを多く含む黒褐・暗オリーブ褐色の粘質シルトで人為的に埋め戻されている。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西側柱列で南から2.5m・2.3m・1.7m・3.1mで、総長は9.6mであり、梁行が北妻から1間目の柱列で西から3.7m・1.7mで、総長が5.4mである。方向は東側柱列でN-1°-Eである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B92】

桁行3間、梁行2間の南北棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B93・181と重複するが、新旧関係は不明である。南東隅柱については削平により失われた可能性がある。

【柱穴】 長径0.7m、短径0.4mの不整楕円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、暗褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は暗・黒褐色シルトである。東側柱列の南から1間目の柱穴には柱材が残存していた。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で南から1.5m・2.0m・1.8mで、総長は5.3mであり、梁行が南妻で西から1.4m・1.7mで、総長は3.1mである。方向は東側柱列でN-18°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B93A・B】

桁行4間、梁行3間の南北棟で、ほぼ同位置で一度建て替えられている。南妻は2間割りとなっている。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B92・181と重複し、S B92よりも新しい。

【柱穴】 Bは長径0.5~1.1m、短径0.3~0.6の不整楕円形で、深さは最も深いもので0.6mである。埋



第15図 遺構配置図(1)

土は地山や黒褐色シルトブロックを含む、暗褐色シルトである。AはBに壊されているため不明である。

【柱痕跡】 直径16cm前後の円形で、堆積土は暗褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で南から2.1m・1.9m・2.3m・2.2mで、総長は8.5mであり、梁行が北妻で西から1.6m・2.1m・1.5mで、総長は5.2mである。方向は東側柱列でN-1°-Eである。

【出土遺物】 Bの柱穴から胎土が赤褐色で、乳白色の釉薬が施された近世陶器片の他、土師器甕、黒曜石製のスクレイバー(第31図2)が出土している。Aの柱穴からは土師器甕が極少量出土している。

【S B99】

桁行3間、梁行3間の東西棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S K102と重複し、これよりも新しい。

【柱穴】 長辺0.6~0.7m、短辺0.4mの隅丸長方形や一辺0.5mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、暗褐色砂質シルトである。

【柱痕跡】 直径16cm前後の円形で、堆積土は地山小ブロックを少量含む、暗褐色砂質シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が北側柱列で西から2.3m・2.2m・2.3mで、総長は6.8mであり、梁行が西妻で南から1.5m・1.6m・1.5mで、総長4.6mである。方向は北側柱列でE-28°-Sである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が極少量出土している。

【S B107】

桁行3間、梁行2間の南北棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S I 32、S A200と重複し、これよりも新しい。

【柱穴】 一辺0.4~0.5mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックや炭化物を含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径15cm前後の円形で、堆積土は炭や焼土粒を含む黒褐色シルトで、北側柱列では抜き取りの痕跡が認められる。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で南から1.9m・1.8m・1.9mで、総長は5.6mであり、梁行が北妻で西から1.9m・2.2mで、総長4.1mである。方向は東側柱列でN-40°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B113】

桁行3間、梁行1間の南北棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B51・114・116などと重複し、S B51より古い。他は不明である。

【柱穴】 直径0.3~0.5mの円形や長径0.5m、短径0.3mの楕円形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを含む、黒色粘質シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は黒色粘質シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西側柱列で南から2.6m・2.3m・3.0mで、総長は7.9mであり、梁行が北妻で3.7mである。方向は西側柱列でN-38°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B114】

桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡で、北側柱列は2間割りとなっている。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B51・113・116と重複し、S B51より古い。他は不明である。

【柱穴】 円形で、直径が0.3~0.4mであり、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックを含む、黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は黒褐色の粘質シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が北側柱列で西から2.2m・2.1mで、総長は4.3mであり、梁行が西妻で南から1.5m・1.3mで、総長は2.8mである。方向は北側柱列でE-43°-Sである。

【出土遺物】 柱穴から土師器壺が極少量出土している。

【S B116】

桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡で、北側柱列は2間割りとなっている。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B51・113・114と重複し、S B51より古い。他は不明である。

【柱穴】 円形で、直径が0.2~0.4mであり、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径10cm前後の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が南側柱列で西から1.8m・2.0m・2.1mで、総長は4.9mであり、梁行が西妻で南から1.1m・1.6mで、総長は2.7mである。方向は北側柱列でE-40°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B121】

東西2間、南北2間以上の建物跡である。

【確認面・重複】 S B178・179、SK126と重複し、SK126より古い。他は不明である。

【柱穴】 直径が0.3~0.4mの円形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は暗褐・黄褐色シルトで、黒褐色のシルトブロックを含む。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は暗褐・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西側柱列で南から1.5m・不明で、南側柱列で西から1.5m・2.4mで、総長3.9mである。方向は南側柱列でE-40°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B131】

南北4間、東西2間以上の建物跡で、東側に廂がつく。

【確認面・重複】 確認面はVIII層上面である。SK192と重複し、これよりも古い。

【柱穴】 長径0.3~0.5m、短径0.2~0.3mの楕円形や直径0.4m前後の円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は地山小ブロックを少量含む黒・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は東入側柱列で南から1.3m・1.6m・1.8m・2.1mで、総長は6.3mであり、南側柱列で西から不明・2.2m・2.1mで、廂の出は1.1mである。方向は東入側柱列でN-43°-Eである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が出土している。

【S B140】

桁行2間、梁行1間の東西棟である。

【確認面・重複】 確認面はⅧ層上面である。SK44と重複し、これよりも新しい。

【柱穴】 長辺が0.8m、短辺が0.6mの隅丸長方形や一辺0.6mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山ブロックを多く含む、暗褐色砂質シルトである。

【柱痕跡】 直径20cm前後の円形で、堆積土は地山小ブロックを少量含む黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が南側柱列で西から2.8m・2.4mで、総長は5.2mであり、梁行が東妻で4.5mである。方向は南側柱列でE-29°-Sである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が出土している。

【S B147】

桁行2間、梁行2間の南北棟総柱建物跡である。

【確認面・重複】 確認面はⅧ層上面である。SK2と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 直径0.3~0.5mの円形や長径0.4m、短径0.3mの楕円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が東側柱列で南から1.8m・1.7mで、総長は3.5mであり、梁行が北妻で西から1.2m・1.5mで、総長3.7mである。方向は東側柱列でN-9°-Wである。

【出土遺物】 柱穴から土師器甕が極少量出土している。

【S B173】

桁行3間、梁行2間の東西棟で、東妻から1間目に間仕切りの柱穴がある。

【確認面・重複】 確認面はⅧ層上面である。SK140と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 直径が0.2~0.5mのやや不整な円形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山ブロックを含む、暗褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は炭化物や地山の粒を少量含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が北側柱列で西から3.6m・2.1m・2.1mで、総長は7.8mであり、梁行が西妻から1間目の柱列で南から1.7m・1.8mで、総長3.5mである。方向は北側柱列でE-40°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B174掘立柱建物跡A・B】

桁行1間、梁行1間の東西棟で、ほぼ同位置で一度建て替えられている。

【確認面・重複】 確認面はⅧ層上面である。SK194と重複し、これよりも古い。

【柱穴】Aは一辺が0.4~0.6mの隅丸方形で、深さは最も深いもので0.4mである。Bは一辺が0.4~0.6mのやや不整の方形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土はとともに地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】Aは直径12cm前後の円形で、Bは直径14cm前後の円形である。堆積土はともに黒・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】柱間はAは桁行が北側柱列で4.9mであり、梁行が西妻で3.6mである。Bは桁行が北側柱列で5.2mであり、梁行が西妻で3.5mである。方向はAが北側柱列でE-38°-S、Bは北側柱列でE-37°-Sである。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S B175】

南北2間、東西1間以上の建物跡である。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S B176と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】直径0.4~0.6mの円形や長辺0.6m、短辺0.4mの隅丸長方形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】直径13cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】柱間は北側柱列で西から3.0m・3.2mで、総長は6.2mである。方向は北側柱列でN-50°-Eである。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S B176】

南北2間、1間以上の建物跡である。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。S B175と重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】直径0.2~0.3mの円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山ブロックを多く含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】直径10cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】柱間は西側柱列で南から2.0m・1.9mで、総長は3.9m、北側柱列1.9m・不明である。方向は西側柱列でN-44°-Eである。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【S B177】

桁行3間、梁行1間の南北棟である。

【確認面・重複】確認面はVII層上面である。SK165と重複し、これよりも古い。

【柱穴】直径が0.3~0.5mの円形や長径0.4~0.6m、短径0.3~0.4mの梢円形で、深さは最も深いもので0.5mである。埋土は地山ブロックや暗褐色シルトブロックを含む、黒・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】直径12cm前後の円形で、堆積土は黒・黒褐色シルトである。南北隅の柱穴には柱材が残っていた。

【柱間・方向】柱間は桁行が西側柱列で南から1.5m・2.8m・2.0mで、総長は6.2mであり、梁行が北

N-S

S12

S24

S36

W12

W-E



第16図 遺構配図(2)



妻で3.6mである。方向は西側柱列でN-39°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B178】

桁行2間以上、梁行2間の東西棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B121・179などと重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 直径0.3~0.4mの円形や長径0.5m、短径0.2mの楕円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山小ブロックを含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は暗・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は桁行が南側柱列で西から3.0m・2.8m・不明で、梁行が西妻で南から2.6m・2.5mで、総長5.1mである。方向は南側柱列でE-38°-Nである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B179】

東西4間、南北2間以上の建物跡である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B121・178、S K126などと重複するが、新旧関係は不明である。

【柱穴】 直径0.2~0.3mの円形で、深さは最も深いもので0.3mである。埋土は地山小ブロックを含む、暗褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は暗・黒褐色シルトである。

【柱間・方向】 柱間は南側柱列で西から1.8m・2.0m・1.7m・2.3mで、総長は7.8mであり、西側柱列で南から2.3m・不明である。方向は南側柱列でE-43°-Sである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B180】

桁行2間、梁行1間の南北棟である。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。S B51・178と重複し、S B51よりも古い。他は不明である。

【柱穴】 長径0.4m、短径0.3mの楕円形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山ブロックを含む、暗・黒褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径12cm前後の円形で、堆積土は暗・黒褐色シルトである。北西や南東隅などでは抜き取りの痕跡がみられ、抜き取り後、地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【柱間・方向】 柱間は桁行が西側柱列で北から2.7m・2.3mで、総長は5.0mであり、梁行が南妻で2.2mである。方向は西側柱列でN-41°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【S B181】

桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、東妻から1間目には間仕切り、あるいは床束と考えられる柱穴がある。

【確認面・重複】 確認面はVII層上面である。SB92・93と重複し、SB93よりも新しい。他は不明である。

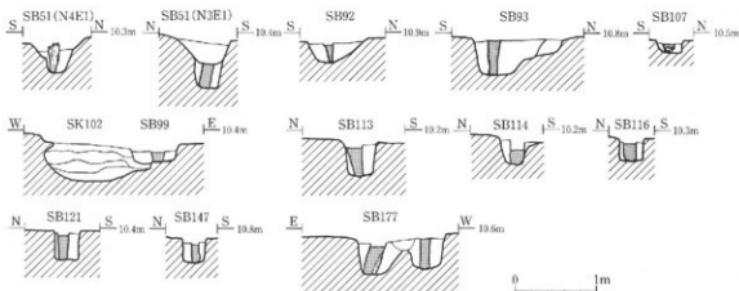
【柱穴】 長径0.6~0.8m、短径0.5mの楕円形や、直径0.4mの円形で、深さは最も深いもので0.4mである。埋土は地山ブロックを多く含む、暗褐色シルトである。

【柱痕跡】 直径14cm前後の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

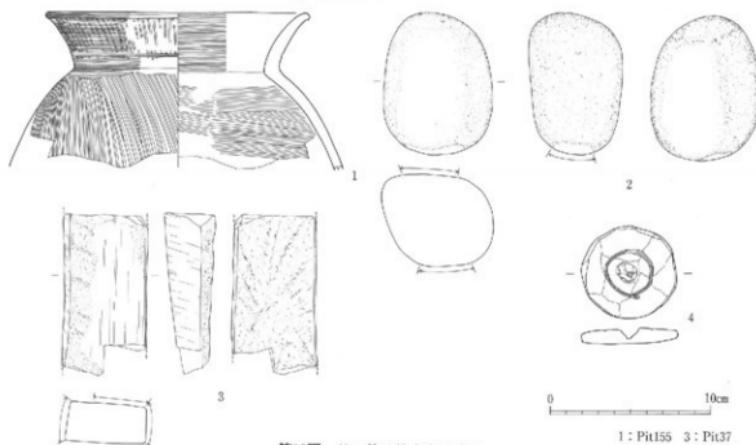
【柱間・方向】 柱間は桁行が北側柱列で東から2.0m・1.9m・不明で、梁行が東妻で1.9m等間、総長は3.8mである。方向は北側柱列でE-17°-Nである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

その他、Pit37・130・143・155などの柱穴からも土師器甕（第18図1）・砥石（3）、磨石（2）、土製円盤（4）などが出土している。Pit155はS I 10より新しい。一辺0.7cmの方形の柱穴で、出土した土師器甕は本来はS I 10に伴っていたと考えられる。Pit130出土の土製円盤は直径約6cmの円形で、焼成



第17図 掘立柱建物跡断面図(2)



第18図 その他の柱穴出土遺物

前に中央部に盲孔と沈線が施されている。

3 井戸跡

14基検出した。出水や堆積土崩落等により、底面まで調査できたものはSE8・14・15・16・50井戸跡である。井戸枠が検出されたものはなかったものの、上部が漏斗状に大きく開くSE14・15・42・43・49などについては本来、井戸枠を有していた可能性も考えられる。

【SE1】

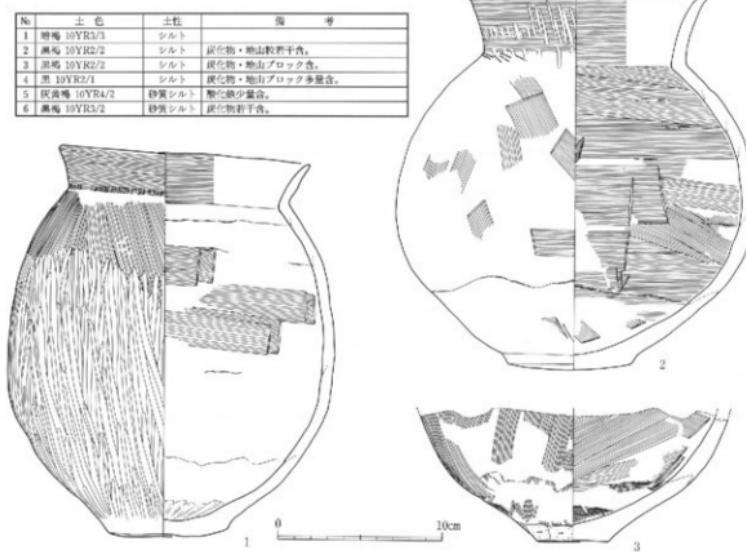
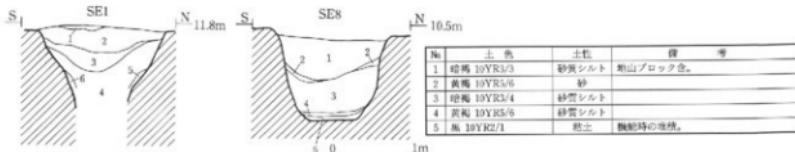
円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】 直径1.6m、深さ1.0m以上で、堆積土は自然堆積の黒・黒褐色シルトである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。

【SE8】

梢円形の、素掘りの井戸跡である。確認面はVII層上面である。



第19図 SE1・8井戸跡

【規模・堆積土】長径1.4m、短径1.1m、深さ1.1mで、堆積土は自然堆積の暗褐色砂質シルトである。

【出土遺物】3層から土師器甕が出土している。球胴形を呈し、器面調整は1が外面はハケメ後、ヨコナデやヘラミガキ、内面はヘラナデやヨコナデである。2は外面がヘラナデ後、ヨコナデされ、更にヘラミガキされている。内面はヘラナデ後、ヨコナデである。3は外面がハケメ後、ヘラケズリ、内面はハケメ後、ヘラナデである。

【SE14】

梢円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】長径2.2m、短径1.7m、深さ1.3mで、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。

【出土遺物】中世陶器、土師器甕、須恵器甕が少量出土している。

【SE15】

円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】直径2.1m、深さ1.3mで、堆積土は自然堆積の黒・黒褐色シルトなどである。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【SE16】

梢円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】長径2.0m、短径1.5m、深さ1.2mで、堆積土は自然堆積の黒・黒褐色シルトである。

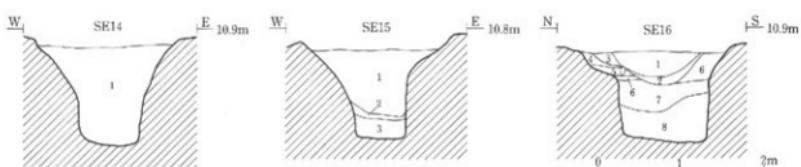
【出土遺物】土師器甕が極少量出土している。

【SE23】

円形の、素掘りの井戸跡である。S I 11より新しい。

【規模・堆積土】直径0.9m、深さ1.0m以上で、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。

【出土遺物】内面を黑色処理された土師器壺や、土師器甕が少量出土している。



No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	SE14 漬化物含。

No	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/1	シルト	SE16 漬化物・塊山ブロック含。
2	黒 10YR2/1	シルト	塊山ブロック含。
3	黒 10YR2/1	シルト	
4	黒褐 10YR2/1	シルト	SE16 漬化物・塊山ブロック含。
5	黒褐 10YR2/1	シルト	塊山ブロック含。
6	黒 10YR2/1	シルト	
7	黒 10YR2/1	シルト	塊山ブロック含。
8	黒 10YR2/1	シルト	塊山ブロック多量含。

第20図 SE14・15・16 井戸跡

【SE42】

やや不整円形の素掘りの井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】直径2.3m、深さ2.0m以上で、堆積土は自然堆積の黒・黒褐シルトや緑灰砂質シルト

である。

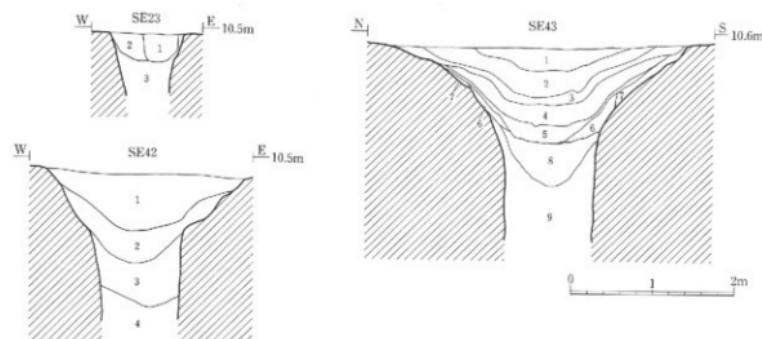
【出土遺物】 土師器壺・甕・壺が出土している。

【S E43】

不整円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。北東側には排水溝と考えられる、深さ5~10cmの浅い溝が接続する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】 直径3.6~4.3m、深さ2.5m以上で、堆積土は自然堆積の黒色粘土等で、第4層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

【出土遺物】 土師器甕や須恵器壺・壺が少量出土している。



No	土色	土性	層号
1	黒褐 10VR2/2	シルト	SE23 地山ブロック含。
2	黒褐 10VR2/2	シルト	
3	黒褐 10VR3/2	シルト	

No	土色	土性	層号
1	黒褐 10YR3/2	シルト	SE43 地山付・小粒的干黄。
2	黒 10YR1.7/1	粘土	灰化帶・灰褐色。
3	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト	酸化帶・マンガン含。
4	灰白 10YR8/1		灰白色火山灰。
5	灰 10YR1.7/1	粘土	該化物多量含。
6	灰褐 2.5YR5/1	粘土	該化物・地山ブロック含。
7	黒褐 10YR2/2	砂質シルト	地山付・該化物含。
8	黒褐 10YR2/2	粘土	該化物含。
9	灰 7.5YR6/1	粘土	粘物質含。

第21図 SE23・42・43 井戸跡

【S E44】

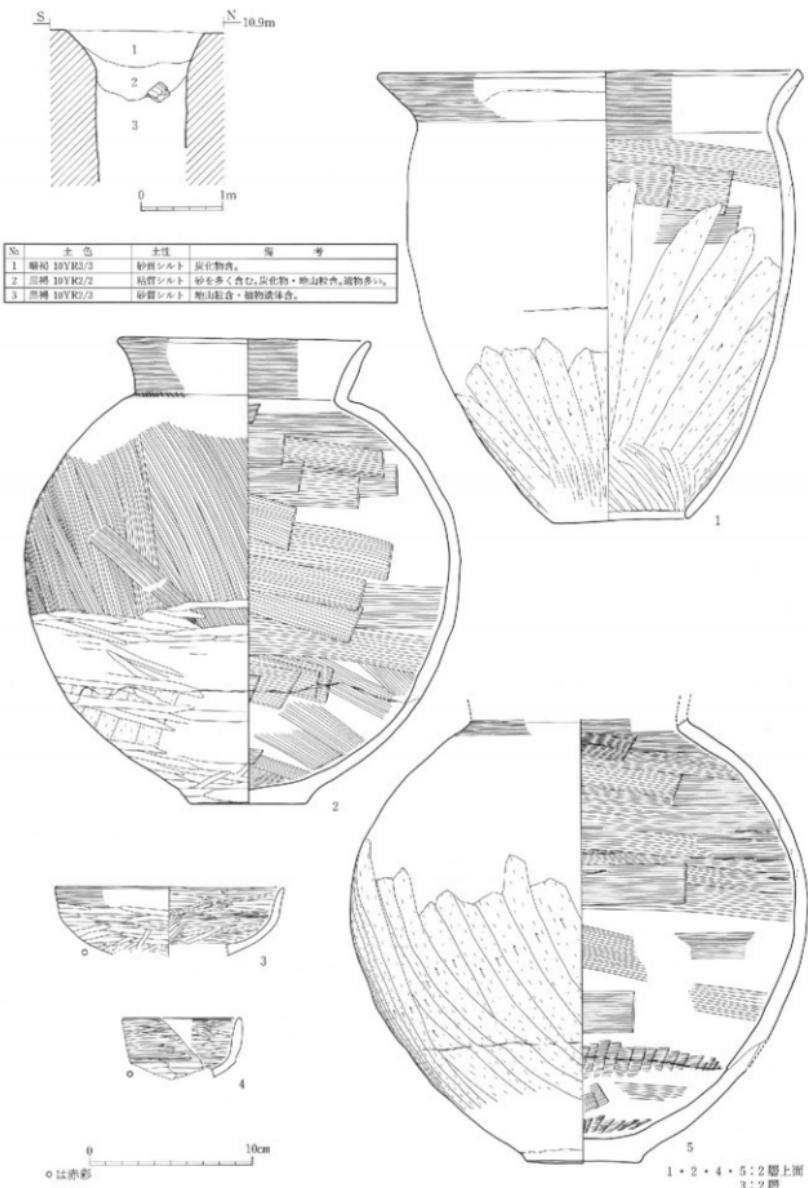
楕円形の、素掘りの井戸跡で、確認面はVII層上面である。S B140と重複し、これよりも古い。

【規模・堆積土】長径1.7m、短径1.4m、深さ1.2m以上で、堆積土は自然堆積の暗褐色砂質シルト等である。

【出土遺物】主に2層上面から土師器壺・甕・壺、鉢・縄文土器、種子、黒曜石の石核（写真図版13）が出土している。

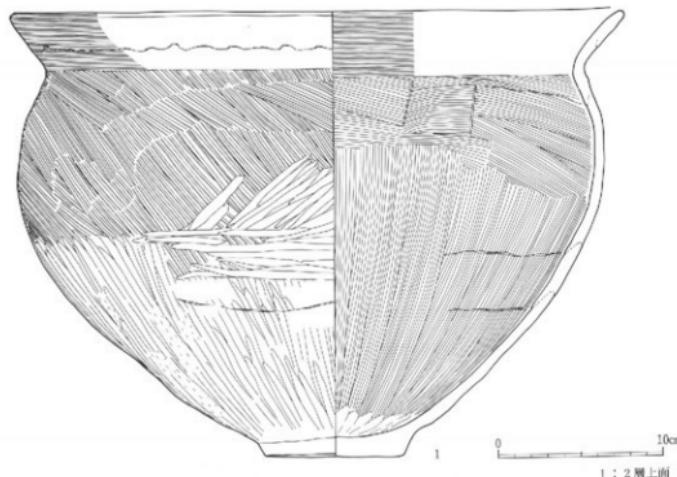
壺は底部から内湾して立ち上がり、口縁部で外反するもの（第22図1）や、外面に段を有し、口縁部が直立するもの（2）がある。甕は球胴形である（2・5）。壺は無底式で長胴形を呈している（1）。鉢は口径37.4cmの大形品である。

器面調整は、壺は内外面ヘラミガキで、3にはヘラケズリやヨコナデ調整もみられる。甕は2は外



第22図 SE44井戸跡(1)

面がハケメ後、ヨコナデやヘラケズリで、更にヘラミガキされている。内面はヘラナデ後、ヨコナデである。5は外面がヘラケズリやヨコナデ、内面がヘラナデ後、ヨコナデである。甌は内外面ヨコナデやヘラケズリ後、ヘラミガキされている。内面にはヘラナデ調整もみられる。鉢は第22図2と同様である。胎土は第22図1には赤褐色粒子が多く含まれ、色調は橙色を呈している。3・4には内外面に赤彩が施されている。



第23図 SE44井戸跡(2)

【S E45】

楕円形の、素掘りの井戸跡である。確認面はVIII層上面である。

【規模・堆積土】長径2.1m、短径1.6m、深さ2.2m以上で、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。

【出土遺物】土師器甌が極少量出土している。

【S E46】

楕円形の、素掘りの井戸跡である。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】長径1.8m、短径1.2m、深さ1.3m以上で、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトや粘土などである。

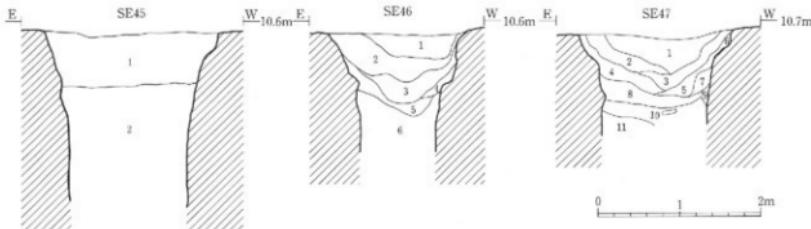
【出土遺物】中世陶器、土師器甌が極少量出土している。

【S E47】

やや不整円形の、素掘りの井戸跡である。確認面はVI層上面である。

【規模・堆積土】直径1.7~1.9m、深さ1.2m以上で、堆積土は自然堆積の黒褐色・褐色シルト等である。

【出土遺物】中世陶器、土師器甌、須恵器甌が少量出土している。



No.	土色	土性	編 号
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	SE45 地山ブロック若干合。
2	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山ブロック若干合。

No.	土色	土性	編 号
1	黒褐色 10YR3/2	シルト	SE47 地山ブロック若干合。
2	黒褐色 2.5Y3/2	粘質シルト	地山ブロック若干合。
3	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山ブロック若干合。
4	褐色・灰褐色 10YR3/3	砂質シルト	小量多量合、軟化泥、ソングイン合。
5	褐色 10YR6/1	粘質シルト	小量若干合、軟化泥多量合。
6	黒 10YR2/1	粘質シルト	地山ブロック・小量合。
7	黒 10YR4/6	シルト	黒褐色セブロック多量合。
8	黒 10YR2/1	シルト	地山ブロック合。
9	黒褐色 10YR3/1	粘土	地山ブロック合。
10	灰オーリーブ 5Y4/2	粘土	小量若干合。
11	黒 10YR2/1	粘土	地山ブロック合。

第24図 SE45・46・47井戸跡

【S E49】

円形の井戸跡で、断面は漏斗状を呈する。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】直系2.2m、深さ1.4m以上で、堆積土は自然堆積の黒色粘土などで、第2層には灰白色火山灰の堆積が認められる。

【出土遺物】土師器壺・甌が出土している。

【S E50】

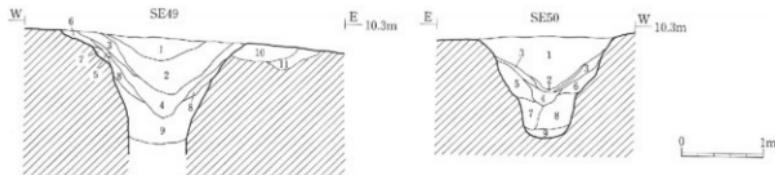
橢円形の、素掘りの井戸跡である。確認面はVII層上面である。

【規模・堆積土】長径1.8m、短径1.3m、深さ1.3mで、南西側は崩落によりやや膨らんでいる。堆積土は上部が自然堆積の暗褐色砂質シルト、下部が人為堆積の黒褐色粘土等で地山ブロックを多く含む。

【出土遺物】第1層から土師器壺・甌、手捏土器、土製支脚が出土し、9層からは土師器壺が2個体、ほぼ完形の状態で出土している。

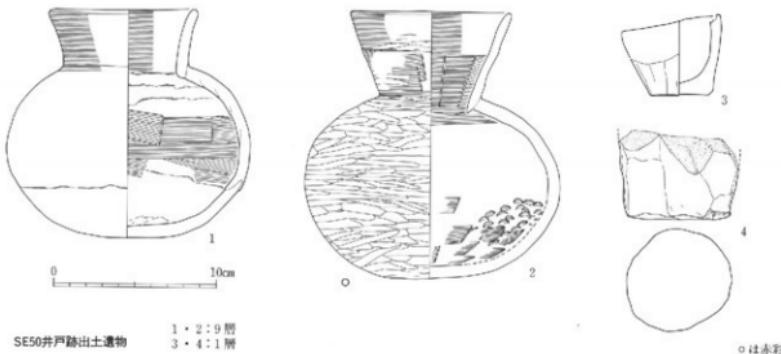
壺は胴部がやや潰れた球形を呈しており、頸部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がるもの(1)と外傾して立ち上がり、頸部と口縁部の境に軽い稜を有するもの(2)がある。

器面調整は、1は内面はヘラナデやヨコナデされている。外面は磨滅により不明瞭である。2は内外面ヘラナデ後、ヨコナデされ、外面は更にヘラミガキ調整されている。また、内面胴部下半の一部には成形時の竹管状の工具痕が残る。2の外面と口縁部内面には赤彩が施されている。



No.	土色	土性	参考
1	黒 10YR1.7/1	粘土	泥炭化シルト・ブロック含。
2	灰白 10YR8/1	粘土	灰白色火成土。
3	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	地山ブロック若干含。
4	黒 10YR1.7/1	粘土	酸化鐵含。
5	黒褐 10YR3/2	粘土	
6	黒褐 10YR4/2	シルト	地山鉄含。
7	黒褐 10YR4/2	シルト	地山ブロック含。
8	黒褐 2.5YR3/1	粘土	地山砂含。
9	黒褐 2.5YR3/1	粘土	
10	黒褐 10YR3/2	粘質シルト	酸化鐵・白色鉄含。
11	黒褐 10YR3/2	粘土	地山砂含。

No.	土色	土性	参考
1	暗褐 10YR3/3	沙質シルト	炭化物・地山鉄含。遺物多い。
2	暗褐 10YR3/3	粘質シルト	地山ブロック含。
3	暗褐 10YR3/3	沙質シルト	
4	黒 10YR2/1	粘土	砂岩下含。
5	黒褐 10YR2/2	粘土	地山ブロック多含。人為的埋土。
6	オーブン焼 2.5Y4/3	粘土	人為的埋土。
7	黒褐 2.5Y3/1	粘土	地山ブロック若干含。人為的埋土。
8	オーブン焼 2.5Y4/3	粘土	人為的埋土。
9	灰 7.5Y3/1	粘土	植物遺存。一括土器上。樹形時の自然堆積。



第25図 SE49・50井戸跡

4 材木列

【S A200】

布掘り状の掘り方を持つ南北方向の材木列を2条検出した。これらは平行して存在し、長さもほぼ同一であることが、2列で1対をなすものと考えられる。

【確認面・重複】 確認面はⅧ層上面である。S B107、S I32、S K35と重複し、S B107より古く、S I32、S K35よりも新しい。

【掘り方】 大部分を抜き取り穴に壊されている為、規模等は不明である。埋土は地山ブロックを含む、黒褐色シルトである。抜き取り穴は長さ4.5m、幅0.3m前後、深さ0.2mの溝状で、堆積土は自然堆積と考えられる暗褐色シルトである。

【柱痕跡】 西側で5カ所、東側で4カ所検出された。直径14cm前後の円形で、抜き取り穴よりも3cm前後深くなっている。堆積土は黒褐色シルトである。柱の間隔は0.2~0.3mで、方向はN-38°-Eである。

る。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

5 土壌

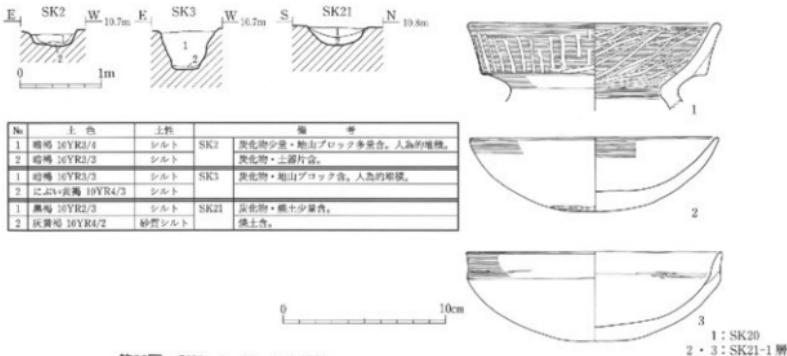
20基以上が検出された。以下、比較的遺物が多く出土しているものについて説明する。

【SK20】

直径0.5mの円形の土壌で、深さ0.2mである。断面は皿状を呈する。確認面はVII層上面である。堆積土は自然堆積の暗褐色砂質シルトである。遺物は複合口縁の土師器壺（第26図1）が出土している。

【SK21】

一辺0.6～0.8mの隅丸方形の土壌で、深さ0.3mである。断面は皿状を呈する。確認面はVII層上面である。堆積土は自然堆積の灰黄褐色砂質シルトなどである。堅穴住居跡の貯蔵穴のみが残存したものである可能性も考えられる。遺物は土師器壺（第26図2・3）・壺が出土している。



第26図 SK2・3・20・21土壤跡

【SK24】

直径0.6～0.7mの円形の土壌で、深さ0.4mである。断面は「U」字状を呈する。確認面はVII層上面である。堆積土は自然堆積の灰黄褐色砂質シルトなどである。遺物は土師器壺（第27図1）・甕が出土している。

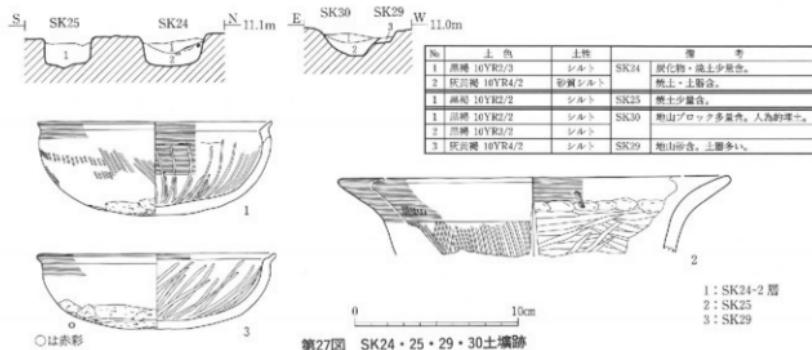
【SK25】

直径0.8mの円形の土壌で、深さ0.4mである。断面は「U」字状を呈する。確認面はVII層上面である。堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。遺物は土師器壺・甕（第27図2）が出土している。

【SK29】

S K30より古い、一辺0.5mの隅丸方形の土壌で、深さは0.2mである。確認面はVII層上面である。堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。遺物は土師器壺（第27図3）・甕が出土している。壺の内面

には赤彩の痕跡が残る。



【SK35】

S A200より古い、直径1.7~1.5mのやや不整円形の土壙である。確認面はVII層上面である。深さ0.2mで、堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。遺物は土師器壺、縄文土器、貝岩製のスクレイパー（第31図1）が出土している。

【SK102】

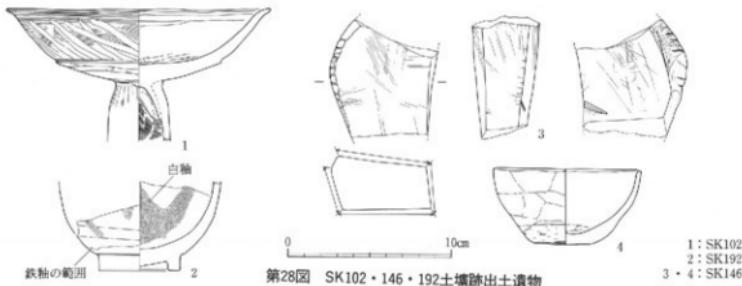
S B99より古い、長軸1.3m、短軸0.9mの不整形の土壙である。確認面はVII層上面である。深さ0.6mで、壁は一部オーバーハングしている。堆積土は人為的に埋め戻された、地山ブロックや焼土・炭などを含む暗褐色砂質シルトなどである。遺物は第1層から土師器壺・高杯（第28図1）・壺が出土している。

【SK146】

S B180より古い、長軸1.0m、短軸0.5mの楕円形の土壙である。深さ0.1mで断面は皿状を呈する。確認面はVII層上面である。堆積土は人為的に埋め戻された、地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は土師器壺・壺、手捏土器（第28図4）、砥石（3）が出土している。

【SK192】

長軸1.5m、短軸1.0の不整形の土壙で底面には凹凸がみられる。確認面はVII層上面である。深さ0.1



第28図 SK102 + 146 + 192土壙跡出土遺物

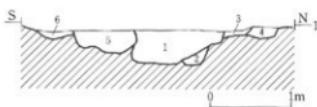
mで、堆積土は自然堆積の暗褐色シルトである。遺物は鉄釉の上に白釉を流し掛けした近世陶器碗(第28図2)が出土している。瀬戸の製品と考えられる。

6 溝跡

12条検出した。以下、規模の大きなものや、溝の性格、年代等がある程度推定されるものについて説明する。

【SD4】

北西から南東に傾斜する溝跡である。確認面はVII層上面である。SD5・6などと重複し、これらより新しい。方向はE-40°-S、長さは12.6mで、南東側は調査区外に延びる。上幅0.8~0.4m、下幅0.3~0.7m、深さ0.4mである。堆積土は地山ブロックや黒色シルトブロックを多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。遺物は出土していない。



No.	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	黒色土・地山ブロック含。
2	黒 10YR2/1	シルト	灰黒褐色シルト・少量・地山ブロック多量含。
3	黒褐 10YR2/2	シルト	黒色土・地山ブロック含。
4	黒褐 10YR2/2	シルト	黒色土・地山ブロック多量含。
5	黒褐 10YR2/2	稍費シルト	地山大ブロック多量含。
6	黒褐 10YR2/2	シルト	黒色土・地山ブロック多量含。

第29図 SD4~7溝跡断面図

【SD22】

南西から北東に傾斜する溝跡である。確認面はVII層上面である。S11と重複し、これより新しい。方向はN-20°-E、長さは11.4mである。上幅0.4m、下幅0.3m、深さ0.1mである。堆積土はしまりのない黒色シルトで、自然堆積と考えられる。中世陶器、須恵器壺、土師器壺・甕が出土している。

【SD182】

北西から南東に傾斜する溝跡である。確認面はVII層上面である。SD183と重複し、これより古い。方向はE-40°-S、2度途切れるが、長さは全体で10.0mで、更に両側は調査区外に延びる。SD184と規模、方向などがほぼ一致しており、これらが対になって道路側溝となる可能性も考えられる。上幅0.3~0.4m、下幅0.2~0.3m、深さ0.1mである。堆積土は自然堆積の黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

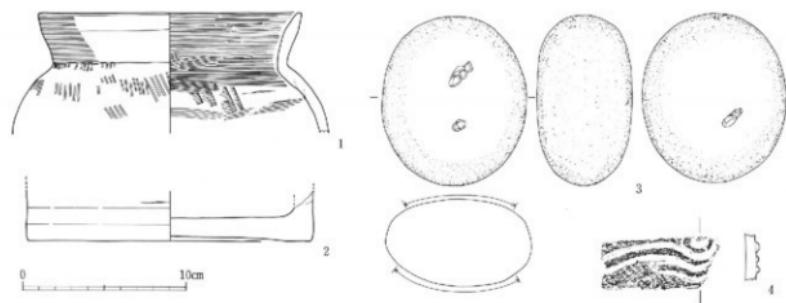
【SD184】

北西から南東に傾斜する溝跡である。確認面はVII層上面である。S132・33などと重複し、これより新しい。方向はE-39°-S、1度途切れるが長さは全体で12.6mで、更に南東側は調査区外に延びる。上幅0.2~0.3m、下幅0.1~0.2m、深さ0.1m未満である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

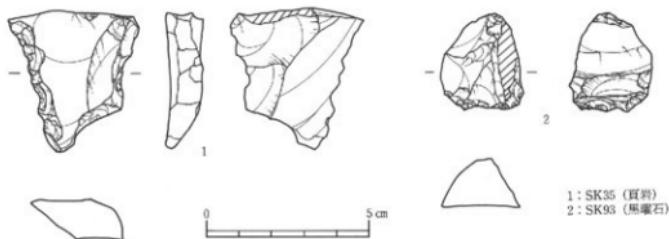
7 表土出土の遺物(第30図)

表土からは、調査区北側から縄文土器(4)、土師器甕(1)、瓦質土器鉢(2)、磨石(3)等が出土している。今回出土した縄文土器はすべて小片のみではあるが、調査区南側からの出土が多く、この付

近ないしは斜面上方に遺構が存在する可能性があると考えられる。



第30図 表土出土遺物



第31図 石器

第V章 考察

【1】遺構・遺物の年代について

A 穹穴住居跡

土器は主にS I 10・11・32・33住居跡から出土している。特にS I 11・32は比較的まとまりを持つ良好な資料であり、ここではまず、この2つの住居跡を中心に遺構毎の土器の特徴と年代について検討し、その後、その他の住居跡について取り上げることとする。

【S I 11】

土器の出土状況：第6図6～8・10・11は床面やカマド内底面、1・2・9・12・14は外延溝の住居内底面から出土したもので、1・12は西側コーナー付近で、つぶれた状態で重なって出土している。また、床面直上の堆積土2層からも遺物が多く出土している（3～5・13）が、これらは残存状況が良く、殆どは住居廃絶時の遺物と考えられる。

但し、13の壺については、焼成が堅緻で胎土も緻密であり、色調も赤褐色を呈するなど、他と比較してやや異質である。また、出土地点も他のカマド周辺に集中しているのに対し、住居の南東隅付近から出土しており、外部からの混入品の可能性も考えられる。

土器の特徴と年代：土師器壺は口縁部と体部との境に明瞭な段を有し、口縁部が外傾するもの（A類）、同じく有段で口縁部が直立するもの（B類）、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部がくびれて外反するもの（C類）がある。壺は鉢形を呈する小形品や、胴部を欠損するが球胴形を呈すると考えられるものがある。

これらの土器と類似した特徴をもつものとしては、本遺跡周辺では小牛田町山前遺跡S I 23住居跡（加藤；1989）、古川市名生館遺跡SK430土壤（白鳥・後藤；1986）、同S I 1217住居跡（高橋；1991）の各出土土器があり、仙台平野以南では山元町合戦原遺跡S I 1住居跡・同住居跡外周溝出土土器（岩見；1991）、村田町新峯崎遺跡出土土器（阿部他；1991）、仙台市藤田新田遺跡S I 16・201出土土器（岩見；1994）があげられる。特に山前遺跡S I 23住居跡や名生館遺跡S I 1217住居跡の各出土土器については壺B類が主体を占めるなど共通する要素が多く、最も類似した例としてあげることが出来よう。

東北地方の土師器編年については氏家和典氏によって、その大綱が組み立てられており（氏家；1957）、山前遺跡S I 23住居跡出土土器は加藤道男氏により、氏家氏が設定した土師器編年の「住社式」に比定されている（加藤；1989）。しかし、本住居跡出土土器と同様の特徴は、同じく氏家氏によって設定された「南小泉式」も比定される、上記であげた新峯崎遺跡や藤田新田遺跡の各出土土器などにも類似したものが認められ、現状ではその編年的位置付けを明確にすることは困難であるといえよう。したがって、今回のところは資料増加を待って今後の検討課題として留めておきたい。

年代は藤田新田遺跡S I 16・201出土土器が5世紀後半、名生館遺跡S I 1217出土土器が6世紀前半頃と考えられており、概ねこれらの年代幅に収まるものと考えられる。

【S I 32】

土器の出土状況：第10図1～3・6・9は床面やカマド内底面から出土しており、住居廃絶時の遺物である。また、5は貯蔵穴堆積土、4・7・8・10は住居内堆積土から出土したものであるが、床面出土のものと比較して壺の特徴などに大きな違いは認められず、ほぼ同時期のものと考えられる。

土器の特徴と年代：壺はすべて丸底である。口縁部と体部との境で屈曲して稜を有し、口縁部がやや内傾するもの（D類）、同じく屈曲して稜を有し、やや外傾気味に直立するもの（E類）。底部から口縁部にかけて内湾するもの（F類）がある。甕は胴部中央に張りがあり、ほぼ球形に近い形態である。高壺は脚部中空で、円錐状を呈すると推定される。

これらと同様の特徴をもつものとしては、本遺跡周辺では古川市名生館遺跡S I 85・433住居跡（白鳥・後藤；1981・1986、鈴木；1995）、仙台平野以南では前出の藤田新田遺跡S I 16・201出土土器や村田町新峯崎遺跡出土土器などがあげられる。これらの土器群はいずれも氏家氏により設定された「南小泉式」に位置づけられている。「南小泉式」は後年、丹羽茂氏が3段階、加藤氏が2段階に細分した編年案を提示している（丹羽；1983、加藤；1989）が、上記の土器群はいずれも丹羽氏のB・C段階、加藤氏の第2段階という「南小泉式」の中でも新しい段階に相当すると考えられており、本住居跡出土土器もほぼ同時期に位置づけられるものと考えられる。

年代は藤田新田遺跡出土土器の年代観から、本住居跡出土土器も5世紀後半頃のものと考えられる。

以上、S I 11・32出土土器の年代を検討したが、両者の年代は比較的近い。S I 11については新しい要素を併せ持つことから、若干幅の広い年代観を提示するに留めたが、両住居跡は隅の角が明瞭で、間仕切り溝を有するなど共通した特徴を有しており、時間的に大きく隔たって存在していたとは考えにくく、ほぼ同時期あるいは継続して営まれていた可能性が高いと考えられる。

[その他の住居跡の年代]

【S I 10】

土器はすべて小破片で、住居に伴うと考えられるのは貯蔵穴底面から出土した壺F類の第4図1のみである。その他のものについては住居廃絶後に流入したものと考えられる。

これらと同様の土器は、S I 11出土土器と同様に新峯崎遺跡出土土器や名生館遺跡S K430・S I 1217、合戦原遺跡S I 1住居跡の各出土土器に類似したものがみられ、本住居跡の年代は5世紀後半から6世紀前半の年代幅に収まるものと考えられる。

【S I 33】

図示した土器はすべて床面から出土したものである。

壺はC・F類がある。壺・甕ともに「南小泉式」に普遍的にみられる器形であり、住居跡も概ね「南小泉式」期のものと考えられる。

【S I 34】

S I 32・33より古い住居跡で「南小泉式」期以前の住居跡である。

B 挖立柱建物跡

調査区北側や南東側に桁行2～3間程の小規模な建物が重複して建てられており、調査区のほぼ中央部には桁行4～5間のやや大きな建物跡がみられる。これらの中にはS B31・172のように東西両面に廂が付くものもあり、建物群の中心的建物であった可能性が考えられる。

建物跡は柱穴の形状や埋土によって、①形状が長辺0.7m前後の隅丸長方形や一辺0.5m前後の隅丸方形で、埋土が地山大ブロックを極めて多量に含む、基本層位VI層起源の暗褐色砂質シルトのもの、②形状が直径ないし一辺が0.3m前後の円形や隅丸方形で、埋土には基本層位III～VI層起源のシルトが含まれるもの、③形状が直径0.7m前後の楕円形で、埋土が基本層位II層起源の暗褐色シルトが主体を占めるものの3つに大別される。また、柱穴埋土との関係から、①はVI層、②はIII層、③はII層の各層上面から掘り込まれたものと推定され、①から③へ新しくなっていると考えられる。建物跡の殆どは②に属しており、①にはS B99・140、③にはS B51・92・93・181がそれぞれ属する。

方向は①は北で東に28°～29°偏しており、③はS B92・181が北で西に17°～18°、S B51・93はほぼ真北方向である。②はS B147のみ北で西に9°偏しており、その他は北で東に10°～52°偏し、ばらつきがみられる。②は遺構数が多いものの建物跡の組み合わせについては、新旧関係を知り得るものも少なく、不明な点が多い。

年代は、①は出土遺物に乏しく明瞭な判断を下すことは困難であるが、掘り込み面と考えられるVI層は後述する古墳時代の井戸跡の廃絶後に堆積している層であり、埋土にI～V層は含まれていない。また、柱穴出土遺物に中世以降と考えられる遺物ではなく、県内の他の遺跡をみても、このような柱穴形状の建物跡は多くの場合、奈良・平安時代頃と考えられていることから、①も奈良・平安時代頃の建物跡である可能性が高いと推定される。②は掘り込み面が①よりも上と考えられることや、②に属するS B161の柱穴から中世陶器が出土し、近世以降の遺物は出土していないことから概ね中世頃の建物跡の可能性が高いと考えられる。③はS B93の柱穴から近世の陶器片が出土しており、近世以降の建物跡と考えられる。

C 井戸跡

井戸跡には堆積土中に、①基本層位VIに対応する暗褐色砂質シルトが堆積するもの、②IV層の灰白色火山灰とV層に対応する黒色粘土が堆積するもの、③III層に対応する黒褐色シルトが堆積するものの3つに大別され、基本層位との関係から①から③へと新しくなっている状況が推定される。①はSE 8・44・50、②はSE 43・49、③はSE 1・14・15・16・23・42・45・46・47がそれぞれ属する。

年代は②が灰白色火山灰との関係から、10世紀前葉以前の井戸跡と考えられる井戸跡で(註1)、①・③について検討すると、出土遺物から年代がある程度推定できるものは以下のものがあげられる。

【SE 8】

甕が3点出土しており、これらは井戸廃絶直後に廃棄されたと考えられる土器である。第19図1・2は完形品で、いずれも球胴形を呈する。

これらは主に「南小泉式」の甕の特徴を有するものであるが、新しいものでは1は前出の名生館遺

跡 S I 1217出土土器にも類似したものが共伴している。2についても本遺跡 S I 11の第6図10が頸部の特徴や肩部の張りなどが近似している。したがって、本井戸跡の年代は上記の土器の年代観から、概ね5世紀から6世紀前半の年代幅に収まるものと考えられる。

【S E 14・46・47】

堆積土中から中世陶器片が出土しており、近世以降の遺物は共伴していないことから、概ね中世頃の井戸跡と考えられる。

【S E 44】

土器が出土したのは2層およびその上面からである。井戸跡は2層から更に深く彫り込まれており、土器は井戸の廃絶後に投棄されたものと考えられる。

坏はS I 11と同様にA類が共伴しており、壺も類似していることから、本井戸跡の年代もこれに近い時期と考えられる。

【S E 50】

井戸跡底面から壺が2個体出土しており、機能中あるいは廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

今回出土した壺のみによって編年的位置づけを明確にすることは坏、壺と比べて類例が少なく、現在のところ困難であるが、類似したものは仙台市岩切鴻ノ塚遺跡 S I 1住居跡出土土器(白鳥・加藤; 1974) や新峯崎遺跡出土土器など「南小泉式」でも新しい段階の土器群に共伴しており、本井戸跡も概ね同時期のものと考えられる。

以上のように、①に属するS E 8・44・50はすべて5世紀から6世紀前半頃の井戸跡と考えられた。③についてはS E 14・46・47が中世頃の井戸跡と考えられることから、その他の井戸跡も概ね同時期の井戸跡である可能性が高いと考えられる。

註1：灰白色火山灰の降下年代については、陸奥国分寺塔跡の調査やこれまでの多賀城跡の調査成果から10世紀前葉頃と考えられている（陸奥国分寺発掘調査委員会：1961、白鳥：1980）。

[2] 積穴住居跡について

ここではS I 11住居跡を中心に、床面の構造や施設について検討を加えてみたい。
S I 11は平面形が方形で、一辺が約6.9mと今回発見された住居の中では最も大きい住居跡である。四隅の角が明瞭なのが特徴である。床面は周間が中央部よりも10cm前後高い台床状となっており、その台床部も北西隅は更に5cm以上高くなっている。また、東側の一部には土手状に盛土した個所もみられる。

床面積は約48m²で、内訳は外延溝分を除き、中央部が約8.0m²、カマド周辺部がカマドや貯蔵穴分を含めて約6.5m²、台床部が約23.0m²である。

床面施設には貯蔵穴、周溝の他、棚状施設、外延溝、間仕切り溝などがある。特に棚状施設、外延溝、間仕切り溝については積穴住居跡に普遍的に認められるものではなく、本住居跡の施設の豊富さは特筆すべきものと言えよう。以下、各施設について検討する。

【棚状施設】カマド東側に設置された階段状の段差を有する施設である。幅は約0.5m、高さは8cm程残

存している。壁と平行にカマド側壁と同様の黄褐色粘土を積み上げ、その内側を地山ブロック混じりの暗褐色シルトによって埋め戻している。壁は直立する。

同様の施設は県内では現在のところ確認されていない(註1)。県外に類似した例を求めるに、東京都や埼玉県で170例程が確認され、集成がなされている(桐生:1977a)。それによると時期は、奈良・平安時代の住居跡が約96%と最も多く、その他には6世紀中葉以降の古墳時代後期のものが約4%ある。本住居跡と同時期のものは現在のところ確認されていない。構築方法には素掘りのものと盛り土するものなどがあり、瓦や粘土などで化粧されているものもみられる。設置場所はカマドのある壁面に設置されるものが約94%を占める。これらの内、カマドに対して右側にあり、構築方法は盛土で、外面には粘土が貼られている本住居跡のものと最も類似するものとしては、埼玉県若葉台遺跡第5号住居跡(坂戸市遺跡発掘調査団:1989)があげられる。またカマド左側にあるという違いはあるが東京都利田西遺跡第113号住居跡(桐生:1997b)なども構築方法、規模など共通する点が多い。

用途としては使用面から土器類や炭化米が出土している例があり、これらを置く為の施設と考えられている。本住居跡では施設手前の床面から貯蔵穴の落ち際に傾くような状態で土器類(第6図10)が倒立して出土している。これは貯蔵穴との間の床面幅が約10cm程しかないことから、本来床面にあったものではなく、本施設に置かれていたものが上方から落ち込んだと推定され、本住居跡のものについても土器などを置く施設であった可能性が高いと考えられる。

[周溝]一部途切れるものの、全辺で認められた。幅3~5cmと細く、深さは最も深い所で約20cmあり、板状の壁材を据えた痕跡の可能性が考えられる。

[外延溝]住居内をほぼ方形に区画して、住居中央部と周辺との境を形成し、北辺西寄りから住居外に延びる溝跡である。貯蔵穴に接続し、住居内から外に向かって穏やかに傾斜しており、住居内の排水を目的とする溝跡と考えられる。また、住居内堆積土と同様の土が堆積していることから、この溝は暗渠ではなく、住居使用中は板などで覆われていた可能性も考慮されよう。

[間仕切り溝]カマドに対し反対側の壁の右隅で3条検出された。これに仕切られた部分の規模は、南東隅が長さ1.8m、幅1.0mで面積約1.8m²、その西側が長さ1.4m、幅1.2mで面積が約1.7m²であり、ほぼ畳1畳分に相当し、寝間などとして使用されていた可能性も推測されるものである。

なお、同様の溝跡はS I 32でも検出されている。

以上、床面施設について述べたが、県内において、このような床面形態や施設の特徴を有する住居跡の類例は比較的少なく、主に古墳時代のものに散見される程度である。最も類似するものとしては前期の名取市野田山遺跡S I 6・23住居跡(須田:1992)や後期の大型住居である山元町合戦原遺跡S I 1住居跡(岩見:1991)などがあげられる。どちらも間仕切り溝を有し、野田山遺跡S I 6・23住居跡では周囲の床面が3~5cm程高い台床状となっている。合戦原遺跡S I 1住居跡も一部ではあるが床面が台床状となっている。また、中期の亘理町宮前遺跡S I 45(丹羽:19)住居跡では、住居内を方形に区画する外延溝が検出されている。但し、前述のように、これらのいずれにおいても本住居跡にみられるような「棚状施設」は検出されておらず、今後、県内でも類例の増加が期待される施設である。

註1:報文中ではふれられていないが、奈良時代の住居跡である日の出山遺跡第2号窓穴住居跡(古川:1993)の北

壁には地山削り出しによる段差が認められ、同様の施設である可能性も考えられる。

第VI章　まとめ

1. 駒米遺跡は江合川と鳴瀬川に挟まれた小起伏丘陵上に立地しており、從来知られていた奈良・平安時代だけでなく古墳時代へ近世までの複合集落遺跡であることが明らかとなった。
2. 今回の調査では掘立柱建物跡34棟、竪穴住居跡7軒、井戸跡14基、材木解跡2条の他、土壙跡、溝跡など多數の遺構を検出した。
3. 出土遺跡には縄文土器、土師器、須恵器、中・近世陶器、石製模造品、石器等が出土しており、古墳時代の土師器が9割以上を占める。
4. 掘立柱建物跡で年代が判明するものには古代以降、近世頃のものまである。
5. 井戸跡は古墳時代のものが3基、平安時代以前のものが2基あり、その他についても中世以前と考えられる。
6. 竪穴住居跡は、古墳時代のものが中期を中心に4軒ある。年代的に不明な他の住居跡も、これらの時間幅に含まれると考えられる。
7. S I 11の床面は周囲が一段高い台床状となっており、床面施設は貯蔵穴、外延溝、間仕切り溝、棚状施設など豊富である。

引用・参考文献

- 阿部 恵他 1991 「新峯崎遺跡」『村田町文化財調査報告書』第9集 村田町教育委員会
吾妻俊典 1994 「山王遺跡I」「宮城県文化財調査報告書」第161集 宮城県教育委員会
岩見和泰 1991 「合戦原遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第140集 宮城県教育委員会
1994 「藤田新田遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第163集 宮城県教育委員会
加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
桐生直彦 1997a 「君は“棚”を見たかー武藏国における棚状施設の事例分析ー」「土壁」創刊号
考古学を楽しむ会
1997b 「多摩和田西遺跡」「東京都遺跡調査研究発表会」22 発表要旨
宮城県教育委員会他 1976 「山前遺跡」
坂戸市遺跡発掘調査団 1989 「若葉台遺跡ー若葉台遺跡発掘調査報告書」ー
佐藤 洋 1990 「南小泉遺跡」「仙台市文化財調査報告書」第140集 仙台市教育委員会
白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥・後藤秀一 1981 「名生館遺跡II」「多賀城門遺跡発掘調査報告書」第7冊 宮城県多賀城跡調査研究所
1986 「名生館遺跡VI」「多賀城門遺跡発掘調査報告書」第11冊 宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥・古川一明 1991 「土師器の編年 8 東北」「古墳時代の研究ー6 土師器と須恵器」 雄山閣出版
白鳥・加藤道男他 1974 「岩切鴻ノ巣遺跡跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書I」「宮城県文化財調査報告書」第35集 宮城県教育委員会
鈴木勝彦 1995 「名生館官衙遺跡XV」「古川市文化財調査報告書」第19集 古川市教育委員会
須田良平 1992 「野田山遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第145集 宮城県教育委員会
高橋誠明 1991 「名生館官衙遺跡X I」「古川市文化財調査報告書」第10集 古川市教育委員会

高倉敏明 1980 「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集 多賀城市教育委員会
丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
陸奥国分寺発掘調査委員会 1961 「陸奥国分寺」

写 真 図 版



調査区遠景
(西から)



SI 10



SI 12



SI 11



カマド周辺



壠状施設



周溝断面(東から)



写真図版 2



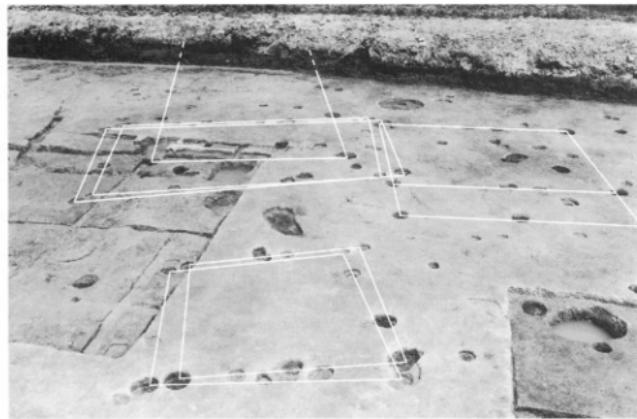
SI 32～34



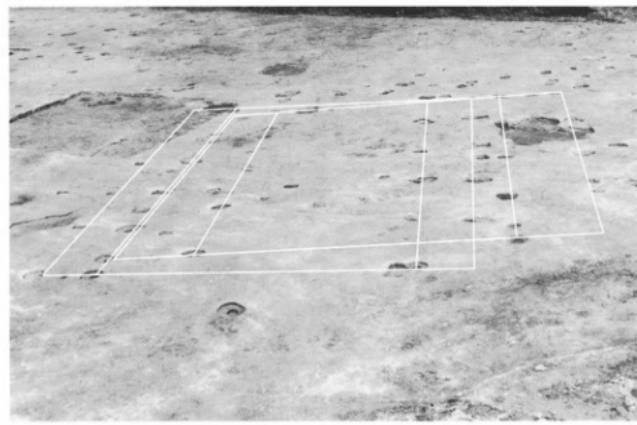
SI 32 カマド



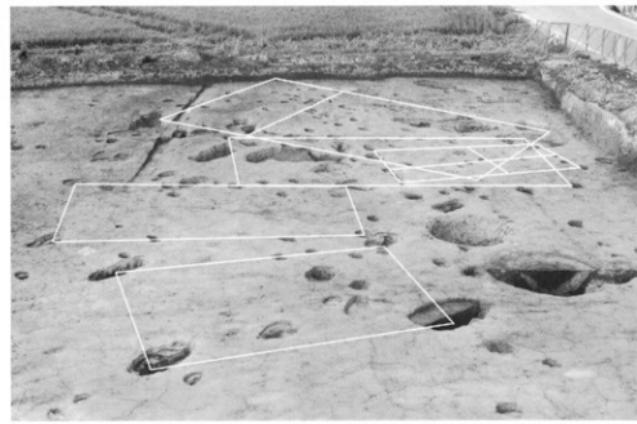
SI 33



SB 55・156
170・171(南から)



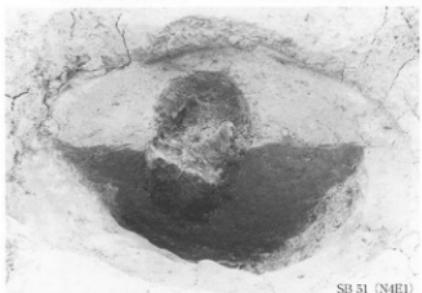
SB 31・172(南から)



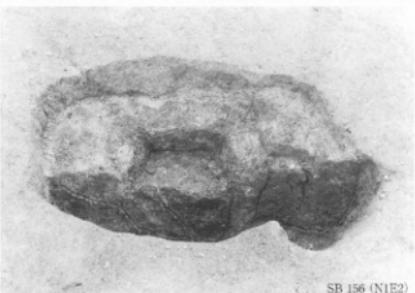
SB 51・113・116
174・177他(西から)



SB 99・107・131
140・173 (北西から)



SB 51 (N4E1)



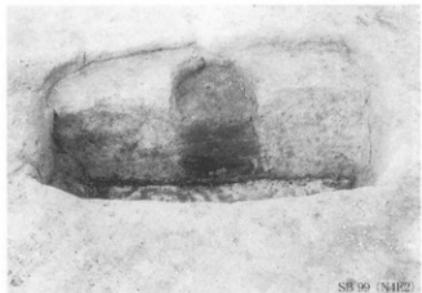
SB 156 (N1E2)



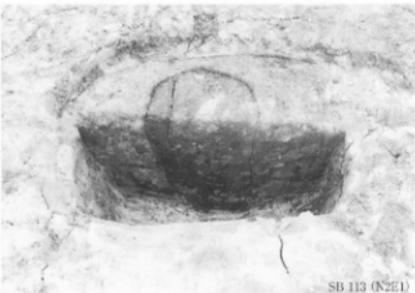
SB 92 (N1E1)



SB 93 (N2E1)



SB 99 (N4P2)



SB 113 (N2E1)



SE 8(東から)



SE 16



SE 42



SE 43



SE 46



SE 47



SE 49



SE 44(東から)



SE 44-2層上面
遺物出土状況
(西から)



SE 50(西から)



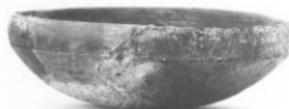
6図2



6図3



6図4



6図5



6図6



6図8



6図7



6図10



6図9



6図11



6図12



10図1



10図2



10図3



10図5



11図1



26図3



10図9



26図2



27図1



27図2



19図1



19図2



22図1



22図2



22図5



23図1



25图1



25图2



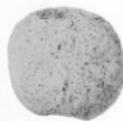
25图3



28图4



28图1



10图16



18图4



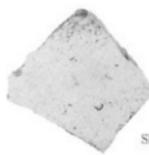
10图8



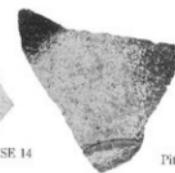
30图4



SK 192



SE 14



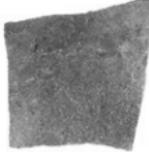
Pit 36



SE 47



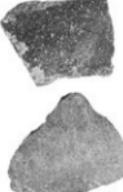
SE 46



SD 22



Pit 36



SB 161



SH 165

表土



7図4



7図5



7図3



10図15



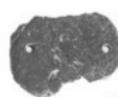
7図6



7図1



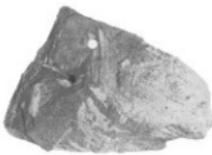
7図2



10図14



13図2



10図12



10図13



10図17



表土



SI 10



SE 44



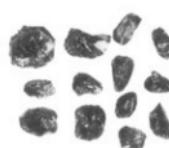
SB 93



SI 32



SK 35



SI 11



30図3



18図2



10図11



28図3



18図3

報告書抄録

ふりがな	こまごめいせき							
書名	胸米遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小牛田町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	佐藤憲幸							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3682							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	道跡番号					
胸米遺跡	宮城県 遠田郡 小牛田町 北浦字胸米	045039	39029	38度 32分 30秒	141度 3分 41秒	19980609~0619 0702~0807	約2,300	保育所 移転 ・建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
胸米遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 井戸跡	土師器 石製模造品 石器		櫛状施設や間仕切り溝、外延溝など豊富な床面施設を有し、床が台床状を呈する竪穴住居跡を調査した。また、古墳時代の素掘りの井戸跡が発見された。		
			奈良 平安	堀立柱建物跡 井戸跡	土師器 須恵器			
			中世	堀立柱建物跡 井戸跡	陶器 砥石			
			近世	堀立柱建物跡	陶器			

小牛田町文化財調査報告書第3集

駒米遺跡

平成10年3月25日印刷

平成10年3月31日発行

発行 小牛田町教育委員会

〒987-0005 宮城県遠田郡小牛田町北浦字駒米13

印刷 株式会社 東北プリント

〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24

